

地方と都市を結ぶホットライン・マガジン

でぽら DePOLA 49

2017年



特集 ● まちに心地よい風
住民協働で地域の賑わい



まちに心地よい風—— [住民協働で地域の賑わい]

●特集企画に寄せて

▶島根県雲南市/
電動カートで
「笑んがわ市」に
向かう高齢者たち



▲北海道江差町/
雪化粧した「いにしえ街道」



▲広島県三次市青河地区/
移住者が建設した新築住宅



▲群馬県南牧村星尾地区/
山際の斜面に広がる畑で
芋ほり会



▲青森県新郷村/
優れた堆肥を使って、
カボチャ農家の日向さん



▲高知県本山町/
棚田へ案内してく
れた本山町農業公社の和田理事(左)
と真辺事務局長



▲岩手県立宮古工業高校/
津波模型班のメンバー



▲鹿児島県屋久島町口永良部島/
民宿「くちのえらぶ」の前で、
貴船さん夫妻



▲山梨県丹波山村/
東京の調理学校
生の料理コンテスト。若い感性が光る



▲千葉県鴨川市四方木地区/
「よもぎday」でスウェーデントーチ作り



▲福島県南相馬市小高区/
仮設住宅集会所でお母さん手作りの
汁で夕食を取る福島大学学生たち



住民が主体になって、地域おこしや問題解決へ向けて動きはじめています。

大半が高齢者で占める山間地の集落。「もう自分たちの代で集落はおしまいかもしれない」と思い至り、それなら「他所の人に来て住んでもらいたい」と発想を変えた。地区の魅力や先祖が苦勞して耕作してきた田畑の大切さを解ってほしい、何とか保全したいと前向きに考え、動きだした。それを行政が地域おこし協力隊の派遣や都市との交流事業等で支援し、地域に新しい風が吹きはじめた。

今回取材した地区は高齢化が進む山間地集落が多かったが、行ってみて実感したのは、「決して消滅しない、希望の集落になる」ということだった。

自治体に頼らず、自分たちで資金を出し合っ、移住者の住宅建設や空き家の改修、高齢者の送迎等を行っている元気な地区もあるが、移住してきた人たちが地区の農業と高齢者の見守りを担っている集落もある。

平成の大合併を機に住民自治活動の低下を懸念してきた雲南市では、旧学校単位の地区を編成し直し、住民が参画して協働する住民自治組織をつくった。いくつかの地区を見学したが、どこも問題意識を持って身近な活動に取り組み、子供が消えてひっそりしていた校舎は自治活動の拠点になった。子どもらの遊び場になり、店舗やカフェも併設する等、以前にも増して賑わい始めている。

この賑わいの輪の中に、U・イーターンする若い世代を如何に取り込めるかが急務である。ムラの人が頑張っていることこそが、地域の最大の魅力だと、若者も子育て世代も理解するようになり、やがて新しい希望の大地へと繋がっていく。

ムラにまちに心地よい風が吹いている——
そんな地域に出会えた取材であった。

特集/まちに心地よい風—住民協働で地域の賑わい

特集企画に寄せて——2

■住民主役のまちづくり

- ・30地区の小規模多機能自治

参画・協働して自治力を回復 島根県雲南市——4

- ・お金では買えない価値を見出した

[ブルーリバー]を設立して地域再生 広島県三次市清河地区——9

- ・忘れていた暮らし、唄、昔話に出会う街

歴史文化を新たな視点で 北海道江差町——12

- ・豊かな自然を生かして

房総[山のまち]に賑わいを 千葉県鴨川市清澄・四方木地区——16



■小ささこそが発信力

- ・多摩川源流の隠れ里

**[小さな村g7サミット]を
誕生させた村**

山梨県丹波山村——19

- ・ゆっくり、のんびり、秘境タイム

山里の暮らしを学び、支援する

群馬県南牧村星尾地区——22

■豊かな農業大地

- ・営農を支援し、米加工品で付加価値を

日本一を誇る[土佐天空の郷]棚田米

高知県本山町 (一財)本山町農業公社——25

- ・理想の資源循環型農業をめざして

[有機の里づくり]事業 青森県新郷村——28

■災害をバネに

- ・被災地との共生をめざして

福島大学[むらの大学]in小高

福島県南相馬市小高区——31

- ・リアルな立体模型で津波防災

[津波模型班]の活動

岩手県宮古市 岩手県立宮古工業高校——34

- ・噴火災害を島づくりのチャンスに

水と緑の“火の島、口永良部島

鹿児島県屋久島町口永良部島 貴船庄二——36



●表紙写真

上左/福島大学「むらの大学」で野菜づくりをする学生たち(福島県南相馬市小高区)

上右/いもほり会に参加した人たち(群馬県南牧村)

中左/木造校舎を改修して交流施設として活用(島根県雲南市入間地区)

下左/棚田米を生産する吉延地区営農組合の人たち(高知県本山町)

下右/専門家の指導でヒノキの伐採体験(千葉県鴨川市四方木地区)

■INFORMATION 39

[全国過疎問題シンポジウム2017 in さか]のお知らせ

・大学と被災地との連携「学都仙台コンソーシアム」 ・若者がムラに短期滞在「にいがたイナカレッジ」

編集後記 奥付



▲自然豊かな中山間地(中野地区)

■住民主役のまちづくり——1

30地区の小規模多機能自治 参画・協働して自治力を回復

島根県雲南市
うんなんし

平成16年に6町村が合併して市制施行した雲南市は総面積553.2km²(東京23区の約9割)、人口約40000人。

中山間地域で全域が過疎地域に指定されている。人口減少と少子高齢化は地域社会の崩壊を招くと、市では合併前より「小規模多機能自治」の仕組みの検討を開始し、約10年前までに全域での地域自主組織の設立を行った。ひとり一人が主役の住民自治を取り戻し、小規模だけれどいろいろな機能を持った参画・協働型の住民自治で、もともとあった住民相互活動を取り戻す仕組みでもあるという。現在概ね小学校区単位の30地区に活動拠点として交流センターが設置され、地域の特性を生かした多様な活動を行なっている。その中から7地区取材した。



▲中野地区「笑んがわ市」の賑わい



▲元書店だった家は図書がいっぱい。就労支援事業を行う「エコカレッジ」では松飾を制作中(三刀屋地区)



▲保全している小学校の教室(入間地区)
▼旧波多小学校に開設した波多マーケット



▲民谷地区「夢民谷の楽校」の看板
▼鍋山地区「まめなか君の水道検針」



住民主体の地域自治組織

いま全国から熱い視線が注がれている雲南市の小規模多機能自治の仕組みについて、雲南市地域振興課は「概ね小学校区単位の小規模組織であるが、様々な機能を持ち、住民が参画・協働する住民自治」とであると定義して

いる。

その特色として、協働では「市民ひとり一人の力を発揮する」「自治の原点を取り戻す」「参加だけではなく参画につなげる」仕組みであること。そして自治体内分権、人口減・少子高齢化にも対応する仕組みであることを挙げています。

高齢化率は現在36・5%で、これは日本の20年後に予想される数値、雲南市は日本の高齢化を先行しているともいえる。

雲南市の地域自主組織は、雲南市が発足する前から、集落機能を補完する自治組織づくりを検討協議し、平成16年には都市建設計画を策定、同年11月に雲南市発足と共に事業に

着手して、17、19年にかけて地域自主組織を設立した。従来の自治会や町内会は自主組織の核として大事であるが、小規模多機能自治組織との違いは、世帯主中心での運営を行う自治会を基軸として、地域に住む多くの住民が参画する組織として機能すること、祭り等の慣習的行事から課題解決のための活動へ、さらに活動拠点として市が整備した交流センターに常勤スタッフがいることである。

現在30カ所に交流センターが設置されているが、各地区の平均人口は1359人、平均世帯440戸。200人弱のセンターから6000人を有する地区もある。活動は多様だが、山間地区は面積は広いが人口は比較的少なく、高齢者や子供たちの日常を支える活動が目立った。

各地を取材して最も実感したのは、地域住民、とりわけ高齢者たちの安心・安全・生きがい活動をメインにしていることであった。交流センターは小中学校の廃校舎やJA、郵便局の一室を有効活用しているケースが多い。中には交流宿泊所として人気の施設や、市外からも大勢が茶飲みにやってくるミニサロン併設の施設もあった。

各地域の自治組織が活発に活動している背景には、合併後の組織設立期に地域振興課をはじめとした市職員が足繁く地域に向いて語り、提案し、研修会等を行って意識改革を図ったことである。

さらに、地域自治事業には過疎債が毎年充当され、26年度は2億4700万円。地域自主組織の地区計画策定経費を始め、生涯学習、地域振興、福祉事業等の経費に充てられ、こ

れが地域に小さな雇用と安心を生んでいると思われる。

週一回の生かいが何よりの楽しみ

秋日和の朝、8時半に出雲空港を出発して、中野地区（人口570人）の「笑んがわ市」をめざした。木曜日に限り午前10時に開店する市場で、中野の里づくり委員会が運営している。山間の道路を登って行くと、電動カーを操縦する3人の女性たちに出合った。「私も笑んがわ市に行きます」と言って道順を教えてくれた。間もなく「笑んがわ市」の旗がたなびく店舗に到着。人々であふれ、隣の駐車場には電動カートがずらりと駐車している。高齢者の足として中野地区のヒット商品になっているようだ。

店舗は元JAのスーパーだったが、平成22年10月に閉鎖した。地区内に店が無くなって不便になったため、ふるさと振興部、女性部、福祉部、食生活改善グループ等が話し合っ、JAの空き店舗を活用して「笑んがわ市」の開催を決めた。地元の野菜や加工食品を販売するほか、奥に茶飲み話ができるミニサロンを設けた。店頭には鮮魚を売る八百屋さんパン店も出店している。

11時前に到着したが、客は開店する10時前には長蛇を作るそうで、野菜はほぼ完売、買物かごを持った列がレジに押しかけている。続いて買物を済ませた人々は奥のサロンへ向かい、店が用意した茶菓子や果物、漬物等を味わいながらお喋りタイムを楽しむ。3脚の丸いテーブルを囲んで50名ほどの人が実に楽しそうに集っている。珈琲やお茶がサービス

され、一人200円。空き席を待っている人もいるので一人約1時間と決めているそうだが、立ちあがる人はいない。聞いてみると「ここに来ると皆に出会える。木曜日が何よりも楽しみ」「前の日は嬉しくて眠れません」「雲南市ではないけど仲間といつも来ます」等々と語ってくれた。グループや福祉関係者10数人が利用できる別室もあり、その日は邑南町から来た団体や中野地区福祉施設のデイサービスに来た高齢者らもお茶会を楽しんでいた。

中野の里づくり委員会の深石広正会長は「年寄りが家にこもりつきりにならないように週一回は出かけてきて皆とお喋りをしてもらうようにしました。高齢者の見守りにもなっています」。

また事務局長の石飛真知子さんは「もつと開店日を増やしてほしいという声もあります、ほとんどがボランティアで働いていますので、週一度が精いっぱいです。木曜日は特別の日と思っっている方が多く、このスパンで丁度いいのではないかと思



▲皆と出会ってお茶とお喋りを楽しむ



▲右／電動カートに乗って「笑んがわ市」に向かう高齢者たち
左／深石会長（左）と中野里づくり委員会の世話人たち



◀福祉、行政、地域自治の関係者が参加して、高齢者の社会参画について学ぶ研修会

います」と言っていた。

空き家が輝く 交流と地域医療の拠点

午後1時から「高齢者の社会参画について考える研修会」が三刀屋交流センターであり、地域振興課山本章平さんから「超高齢化を迎える中で、高齢者の豊かな知恵や技術、経験が地域課題の解決に欠かせない。地域福祉担当者や行政関係者の他に、各地域自治組織の方にも参加して研修をしてもらっています」と見学を進められた。150名が入場できる会場はほぼ満席で若い人の姿が多い。

事例発表として愛媛県新居浜市の「健康寿命延伸」活動が報告され、続いて高齢者がイキキとした地域とはをテーマに、ペーパーワーク制作のグループワークを行った。

三刀屋交流センターにデスクを置く三刀屋地区まちづくり協議会（人口2554人）の上代真会長が昨年6月にオープンしたみとや

世代間交流施設「ほほ笑み」へ案内してくれた。家々が軒を連ねる市街地だが、人通りは少ない。

「ここは周辺町村の中では一番賑わった市街地でしたが、合併して新庁舎が移転してからはすっかりさびれました。元書店だった家を『みとや世代間交流施設』として改装しまし

た。空き家を活用して地域を活性化することが願いです」と言う上代さんは元銀行マン、三刀屋の住民が世代を超えて交流できる場をめざしてきた。

「ほほ笑み」は2階建ての大きな家で、50人ほどは座れる椅子・テーブルがあり、壁側には絵本や図書がぎっしり並んでいて、図書の貸し出しの他、インターネット等で中古図書の販売もしている。その日は就労支援の事業を行う「エコカレッジ」の松飾作りが小川肇さんの指導で行われていた。

日頃から、中学生らの自主学習の場として人気があり、また三刀屋高校生と住民の交流や高校生の地域医療見学等も開催される。

続いて上代さんが案内してくれたのが2階に事務所がある訪問看護ステーション「コミケア」。看護師5名、作業療法士1名と管理事務員ら8名が働く株式会社「コミケア」で、代表取締役の歌田ちひろさんが連絡事務をしていた。

「雲南市は地域医療の先進地ですが、病院を出て在宅医療をする機会はまだまだ少なかった。かつて父親が自宅で独り死去した経験を持つ看護師の矢田明子さんの呼びかけで、U・Iターンしてきたプロの看護師を集めてコミケアを組織化しました。私も移住してきたひとりです。普通看護師は事務所へ帰って日誌や介護記録を書きますが、ここではスマートフォンに入力、それを全員が所有しますので、事務所へ来る必要がない。今は市立病院と連携して40人が在宅介護に当たっています。看護学校の生徒を40日間雲南市へ招いて地域医療を学ぶカリキュラムも好評です」と歌田さ



▲空き家だった書店を三刀屋世代間交流施設に
▼「ほほ笑み」の前で、上代会長



んは説明する。「ほほ笑み」でも住民健診や健康相談を定期的に行っており、民家にこのような先端医療の拠点があるとは驚きである。

高齢者を 24時間見守る

鍋山地区（人口15



54人）の地域自主組織「躍動と安らぎの里づくり鍋山」では「躍動鍋山の運営」として4本柱を設定しているが、話題の事業が「まめなか君の水道検針」と「まもる君のまかせ支援」。まめなか君の水道検針事業は平成24年4月より市から委託を受けた鍋山地域の検針員が420戸の家をまわって水道検針し、「まめなかね（元気かね）」と声をかける活動。

▶地域医療を担う会社「コミケア」を運営する代表の歌田さん

秦美幸会長は、「市から手数料が入るので検針員の高齢者の見守りがしつかりできます。しかし声掛けをする要支援者は増えているため、見守り機能を充実するために同時に始めたのが、まもる君」です。一人暮らしの高齢者などに紐を引くだけで交流センターとつな



▲鍋山地区の事務所は郵便局を併設している(上)
秦会長と「まもる君のまかせて支援」の携帯電話



がる携帯電話を渡しておき、いざというときに連絡してもらいます」と、カラフルな携帯電話を見せてくれた。24〜28年度までの着信数は139件、訪問件数は140件だったが、最近を着信が減る傾向にあるため、見守りを兼ねて自宅訪問をしている。

「お伺いすると、携帯電話を放り出している人もいますので、外出の際も身に付けるように説明しています」と話すのは「地域づくり応援隊員」の古市妙さん。古市さんは昨年10月から鍋山地区を拠点に地域づくりの活動をしている看護師で、雲南市と市立病院が主催する「雲南医療見学ツアー」に参加したことが縁で、鹿児島大学の病院を辞めて移住してきた。地域の中でまちづくりに関わりながら健康相談や血圧測定等を提供していきたいと、鍋山交流センターで働いている。



▲「新市いきいき会」の郷原事務局長。毎月「新市いきいき」を発行している



市いきいき会」(人口553人)。地区にどんな子供や高齢者がいるかを把握するため、住民との話し合いを経て、世帯別に氏名、生年月日、電話番号、家族の連絡先等を書いた情報を提供してもらった。それをデータ化したのが「住民福祉カード」で、当初は作成目的や管理方法に問い合わせが多かったが、いまでは理解されて住民情報を100%カバー。その住民福祉カードを基本にして作成したのが要支援者を共助する仕組みで、災害時に誰が誰を助けるかを定めた。支援を頼む「お願い会員」に対して「まかせて会員」は複数員おり、それに沿って避難訓練も実施している。郷原剛志事務局長は「新市は一番小さい地区で、交通要所にあるせいもあるが、共働き世帯が多い。日中は一人で過ごす高齢者が多いことから、地区住民情報を把握する必要があるりました。住民情報は市にもありますが公開はしない。要支援者をデータ化することで、日ごろの見守りや災害時の避難支援等ができる体制となりました」と語る。

他に各種祭りや交流会、竹林環境整備事業や幼稚園児や子供が参加する「竹ん

子クラブ」、「斐伊川水辺の楽校」等を開催している。

店舗、子供の遊び場…… 廃校を100%活用して

雲南市南部の波多はたコミュニティ協議会(人口350人)は廃校になった旧波多小学校に事務所を置き、そこで「波多マーケット」を運営している。波多地区は交通機関がない山間部で、多い時は人口1400人ほどで20軒ほどの店もあったが、2年前に最後の店が閉店した。そのため協議会がミニスーパーの運営に乗り出した。

学校校舎は築20年程だが、手入れされているせいか真新しい雰囲気、玄関を入ると子どもたちの声が聞こえてきそう。廊下を回った奥が店舗になっていて、生鮮食品、保存食品、日用品まで700品目を揃えてスーパー並みの価格で販売している。地元主婦グループ「手わるさの会」が手作りしたジャムやクッキー、洋菓子などがお洒落に包装されて売られ、肌にあざといという手製石鹸もあった。

日・祭日を除いて午前9時から午後5時半まで営業、一日平均30名が利用するという。対応してくれたのは協議会主任の田部和女さんと支援員の森山緑さん。「水曜日は特売日になっているので利用者が多いんです。店に來れない人にはこちらから届けています」店の入り口には無料サービスのお茶と珈琲が置かれ、隣には住民が自由に利用できる談



▶旧波多小学校に設置された波多コミュニティ協議会運営のマーケットで、田部さん、森山さん





▲入間交流センター
▼左/松村センター会長 右/厨房室を完備した食堂



話室、住民健診や研修会等を使う教室がある。図書館と音楽室はそのまま保存され、地区の人が何時でも活用できるとか。

同協議会がもう一つ力を入れているのは、住民の足となる「たすけ愛号」車の運行。運転手は協議会の職員で、波多地区内に限り無償で利用できるサービス。「温泉、郵便局、診療所などを利用する人が年間延べ450人います。皆さんの健康や暮らしの様子を知る機会にもなっています。私たちは民生委員も兼ねたよろずやです」とふたりは明るく言った。

廃校となった小学校を交流拠点にしているのは入間地区の入間コミュニティ協議会（人口272人）も同様だが、廃校になった木造校舎は早稲田大学建築学科の協力を得て内外装し、お洒落な宿泊・交流施設に変身した。旧木造校舎に接して、青少年らが宿泊・研修に利用できるように、近代的な厨房のある食堂や広々とした縁側、研修室等へと改修された。100年の歴史を持つ木造校舎は、磨き上げられて命を吹き返したように輝き、暖かい。

2階には学校と地域の歴史と歩みをモダンに展示する教室もある。宿泊だけで年間800人を超え、リピーターが多いようだ。他にも100人の早乙女たちが笛太鼓に合わせて田植えをする5月末の「花田植え」には、早乙女になる女性と見学者が数百人がやってくる。手入れされた庭を見ていると松村千弘会長が出てきて、「学校へ入ってくる小さな橋がこの歴史で、昔は他に道がなくこの橋だけでした。大きな樹木や草花も地域の人が手伝いながら守り育ててきました」という。

もう一つの名物が地元的女性たちが作る料理で、その日も四国から10数名が見学に来て昼食するそうで、台所では6、7名の女性が調理に追われていた。地元の素材をメインにした創作料理で、予約して訪れるグループが多いようだ。

田園地帯の一角に牧歌的な雰囲気の小学校がある。旧吉田村の最南端に位置する旧吉田小学校民谷分校で、現在民谷地区振興協議会（人口168人）の事務局になつている。振興協議会が設立されたとき、夢のある場所にしたと「夢民谷の楽校」と名付けられた。山間にある宇山地区（74人）と民谷地区（94人）で設立された自主組織で、高齢化率は44・7%。旧吉田町はたたら製鉄の生産地として知られるが、民谷は標高500mの中山間地で、清流と気温差を生かした美味しい米どころとして栄えてきた。

民谷分校が136年の歴史に幕を閉じ閉校したのは平成24年3月。4月に分校の活用と地域の課題に向けて民谷地域活性化委員会を

立ち上げ、一年間にわたって討議や勉強会を重ねてきた。それが地域自主組織に移行し、平成26年1月に民谷地区振興協議会としてスタートした。

住民に愛され続けてきた木造校舎の廊下の壁には子供たちのスナップ写真や絵画等がところ狭しと貼られていて、「夢民谷の楽校」にふさわしい。

振興協議会の主事をする福島美幸さんは、今年3月に定年退職で教師を辞めてここでお手伝いしています。吉田小学校でも教師をしていたので、親子共知り合いが多い。学校帰りの子供は大抵ここへきて、学習したり卓球などをしていきます。田植え・稲刈り体験会や吉田町内の子供が集まって民谷周辺で自然体験をする2泊3日の自然塾、大学生との交流会等、行事が多いですね」と言う。

そんな子供たちの絵画や版画は「大好き吉田町」という3種類のカレンダーに制作されている。地域を子供の視線で描いた絵には郷土愛が溢れていて、少子化を食い止め、子供を自然の中で元気に豊かに育てたいという住民の想いが伝わってくるようである。高齢者の食事会や住民の生涯学習も盛んで、拠点となる小学校は以前にも増して活気を呈しているようにみえた。

文／浅井登美子 写真／満田美樹



▶民谷地区の「夢民谷の楽校」。廊下には貴重な資料をいっぱい展示
左下/振興協議会主事の福島美幸さん
(右)と福祉推進委員の福島恵子さん

「ブルーリバー」を設立して地域再生

広島県三次市青河地区

お金では買えない価値を見出した



▲現在のブルーリバーのメンバーたち。楽しく活動するのがモットー

地域再生の先進的事例として注目を浴びている、広島県三次市青河地区。人口約500人、世帯数約180戸のこの小さな町では、有志9人が100万円ずつ出し合い、自己資金で住宅を新築、地域外から子育て世代の家族を迎え入れて、少子化に歯止めをかけることに成功した。また、交通手段のない高齢者のために、全住民が会費を払ってワゴン車を共有、暮らしサポートを行っている。行政に頼らず、地域の課題解決に努める住民たちの活動は高い評価を受け、平成24年に「第2回地域再生大賞」を受賞した。青河自治振興会の岩崎会長にお話をうかがった。



▲住民たちが“地域の宝”だという三次市青河小学校



▲青河小学校に隣接する青河コミュニティセンター。地元の人たちは親しみを込めて「コミセン」と呼ぶ



▲アイデアマン、青河自治振興会会長岩崎さん

地域の宝、青河小学校を守れ！

夏には蛸が乱舞する小似川の清流と、緑豊かな里山に抱かれて建つ三次市立青河小学校。青河の地域再生活動は、この小学校を守りたいという住民たちの熱い思いから始まった。今から60年近く前のこと。「分教場しかないこの地に、学校を作ってほしい」という住民たちの陳情で、青河に古い木造校舎が移築された。住民たちは校舎の横の荒れ野原を手作業で掘り起こし、グラウンドを整備した。

「当時、僕は小学1年生。校舎の2階から見たその光景が今も目に焼き付いている」

そう語るのは、青河の地域再生活動の中心を担っている人物で、青河自治振興会会長の岩崎積さん(66)。

校舎は平成7年に建て替えられて新しくな



▲移住者が建設した新築住宅
 ▲ブルーリバーが空き家をリフォームしたマイホーム



▼自宅前に立つ伊藤美幸さんと長男の群晴くん（11歳）。木造二階建て・3LDKで、家賃は5万3000円だ



ルールで、1000万円は事実上寄付のようなものだった。
 入居者を募る際、ブルーリバーでは以下のような条件をつけた。
 ・小学生以下の子供がいる家庭であること。
 ・必ず青河小学校に通学すること
 ・学校教育への理解と

- ・協力ができること
- ・地域行事には積極的に参加すること
- ・常会には必ず加入すること

つたが、児童数は減少の一途をたどった。そして平成10年代、合併前の旧三次市で青河小学校が統合・廃校の候補に挙がってしまった。地域に学校がなくなると子育て世代は離れていく。少子高齢化が加速することを住民たちは危惧した。

「小学校は地域の宝。青河小学校だけは何としても残したい！」

岩崎さんは、公民館館長だった瀬戸昇三さんと、少子化に歯止めをかけ、小学校を守るにはどうすればよいかを話し合った。そして、考えついたのが、住宅を建設し、子育て世代の家族を他地域から迎え入れること。

平成14年、有志9人が100万円ずつを出資して、「有限会社ブルーリバー」を設立、定住促進事業をスタートさせた。「脱退しても出資金は返済しない」「配当金はない」という

「一度に多くの人が移住してくると地域運営ができなくなる。誰でもいいから住んでほしいわけではない。地域が求める人たちを選び、青河に見合った人口誘致ができたのは、行政に頼っていないからなんですよ」と岩崎さん。ブルーリバーは、平成19年までに新築住宅6棟、リフォーム住宅5棟を整備。それらの住宅に14家族64人を入居させた。青河コミュニティセンターで事務職員として働く伊藤美幸さんも10年前、夫の転勤にともなって、2人の子ども（当時、3歳と1歳）とともにこの地に移住した一人。ブルーリバーの一戸建て住宅を借りている。

「家賃は3LDKで5万3千円。環境はいいし、地域の人は親切だし、とても住み心地がいいですよ。近隣のおじさんやおばさんが玄関前に野菜を置いていってくれたりします。子どもたちも地域の人に可愛がってもらって、すっかりここが気に入ってるようです」

ワゴン車を共有し移動サポート

ブルーリバーが設立された2年後の平成16年、三次市は、平成の大合併で1市4町3村が合併した。その際に設置された19の住民自治組織の中のひとつが青河自治振興会だ。

振興会は2年後、行政指導で、青河ビジョンを作成。「豊かで美しい自然環境がまもられる町」「お年寄りを大切に、生きがいのもてる諸条件が整った町」「少子化に起因する諸問題に積極的に取り組む町」など9つのビジョンを打ち立てた。

「われわれは、そのビジョンに沿って地域運営を行っているんです」と岩崎さん。

平成23年6月に開始した「暮らしサポート事業」もその一環だ。住民が共有するワゴン車で、高齢者の買い物や通院などの送り迎えを行う移動サポート。運営費用は、青河の全戸が年会費（4500円）を負担することで賄い、運転手はボランティアだ。このシステムは他の地域にもあるが、青河の場合は全住民が車を共有している点が独特だ。しかし、このサポートを利用しない世帯にも、年会費を負担するよう説得するのに時間がかかったという。

「みんないつか年をとる。将来的には自分も利用するわけじゃけんね。地域版の保険だと考えればいいんじゃないよ」というのが岩崎さんの論理だ。

暮らしサポートは週に3回、1日3往復運行し、平成25年度は延べ1752人が利用した。取材に訪れた日の午後、三次市の市街地に向かうワゴン車に同乗させてもらった。70

▶経営を安定させるために太陽光発電設備を設置。売電収益を家賃収入の補てんに当てている



80歳代の5人の女性たちが街の大型スーパーマーケットの前で待っていた。病院で治療を受けたあと、買い物などの用事をすませたため、手に大きな買い物袋を下けている。笑顔で車に乗り込んできた5人は移動サポートについて、「自宅まで送迎してくれて、重い荷物があるときは、運転手さんが家の中まで運んでくださる。本当に感謝しとります」と口を揃える。

暮らしサポートの管理をしている青河コミュニティセンターの伊藤さんの話では、離れて暮らし家族からも感謝の声が寄せられているという。

「高齢者の交通事故が増えているので心配されとったようです。移動サポートができたおかげで、おばあちゃんが免許証を返上し、安心してとられるそうですよ」

ちなみに、移動サポート事業は、住民が老後も安心して暮らせることを目的として開始した「暮らしサポート事業」の一つである。

他に、課題を解決するための依頼先の紹介や調整を行う「お頼み事業者紹介」、福祉サービス手続きや買い物などの代行を行う「代行サポート」、よろず相談や子どもの学習支援を行う「知識情報サポート」、親睦活動や交流会などの支援を行う「お楽しみサポート」がある。

岩崎さんは、これらの事業もブルーリバーの事業も一つにつながっていると話す。

「学校を残すためには、子どものいる家族に移住してもらわねばならない。そのためには環境のよい、住みやすい地域を作らなければならぬ。空き家をなくすことも、高齢者が

安心して暮らせることも、蛸がたくさん棲むきれいな川を守ることも、すべてが一つにつながっているんです」

楽しく豊かに暮らせる環境

翌朝、ブルーリバーの社長、瀬戸昇三さんが作業着姿でコミュニティセンターに現れた。岩崎さんと伊藤さんから「人間の豊かな人」と聞いてはいたが、なるほど、温和で自然体の魅力的な人だ。89歳とは思えぬ軽妙な語り口で、ブルーリバーが成功した理由を話してくれる。

「一番は、グループの人間関係がよかったこと。年代も性格も違うのに、9人集まって話し合うと、不思議に一つの考えにまとまる。だから事業がスムーズに進んだんですよ」

買取した空き家の片付けや掃除、草刈りなども、ブルーリバーのメンバーたちがボランティアで行っている。それについても「疲れるとか、大儀とかいう気持ちじゃあなくておこらんのだよ。みんなと一緒に働くことが実に楽しい。ワハハ」

そしてもう一つ、活動が順調に進んだ要因に、青河の地域性が関係していると指摘する。

青河は、小似川の周辺に生活文化が発達してきた集落だ。昔は農業用水も生活用水も川から取らなければならなかった。川上に住む人も、川下に暮らす人も、みんなが安全に、便利に暮らせるよう思いやることで、譲り合いの精神が培われた。また、貧しい集落だったため、みんなが助け合い、子どもたちは地域で育てるといふ考え方が強かった。昔から子どもの教育には関心が深く、学校は地域の

宝だ」と多くの住民が考えていた。「われわれがいくら、小学校を残したい」と頑張っても、地域の人たちの理解がなければできなかったでしょう」

配当もなく、出資金の返済もないという条件で、100万円を出資する人が9人も現れたのも、青河の地域性だろうか。

最後に、青河の成功事例を、他の過疎地域に生かせないか、お二人に聞いてみた。

「損得で考えたら成り立たんでしょう。ここには全国から多くの人が視察に来られますが、青河のやり方をそのまま持ち帰っても役には立たないと思います。自分の町の地域性を生かして、そのなかでできることを考えなきゃいけない」と岩崎さん。

「ブルーリバーの活動が地域再生大賞の候補に挙がった時、審査の方々が半信半疑で、委員長自ら確認に来られたんですよ。そして、世界に類のない考え方をしている、と驚かされていた。

100万円の出資に対して、われわれは、金で買えないもんを得ているんです。生きる上での価値観というか、意識の変革が必要かもしれないねえ」と瀬戸さんも言う。

お金以外の目に見えない価値を見出すこそが、これからの時代、豊かな地域を創り上げるカギとなるのかもしれないと思った。 文・写真／小田礼子



左／暮らしサポートのワゴン車を利用する住民たち
右／有限会社ブルーリバーの社長、瀬戸昇三さん

●有限会社ブルーリバー
青河コミュニティセンター内(青河自治振興会)
☎0824-67-3701



▲雪化粧した「いにしえ街道」。再生・改装した古民家や蔵が並び

へかもめの鳴く音に ふとめをさまし あ
れが蝦夷地のやまかいなと全国のファン
に唄われ続けている「江差道分」。北前船
やニシン漁で賑わった町には160年前の
蔵や家屋敷が残り、「いにしえ街道」として
再生整備が進み、かつての賑わいを取り戻
しつつある。江差町は平成27年8月に、全
国で一番若い照井町長を迎えたのを機に、
古くて新しい歴史文化の町づくりをめざし
て邁進している。

▶目の前には日本海、北前船が出入り
した頃を偲ばせる家屋敷が並び集落



江を頻繁に利用し、それによって宿場や蔵が
出来、各地を旅してきた船頭たちにより「江
差道分」の唄が定着した。
明治元年に江差沖で座礁、沈没した幕府軍
艦を実物大で復元した開陽丸とかもめ島が一
望できる海辺に江差町役場がある。外見はコ
ンクリート建てだが、内部は廊下や壁が木造
で作られ、ホットな雰囲気。2階総務課の奥
にある町長室で照井町長が多忙な時間をさい
て待っていてくれた。
照井誉之介町長、32歳。噂に違わず若くて
ハンサムボーイだ。横浜育ち、早稲田大学政
経学部を卒業して北海道新聞社に入社、編集

若い新聞記者に託された町の変革と将来

住民主役のまちづくり——3

忘れていた暮らし、唄、昔話に出会う街

歴史文化を新たな視点で

えさしちよう
北海道江差町

11月下旬の北海道は、
真冬並みの寒波で各地
が豪雪に見舞われ、江
差町も薄く雪化粧した。
しかし心配したったば
風はなく、奥尻島を
結ぶフェリーが順調に
往來している。目の前
にあるかもめ島が格好
の入江を形成している
ため、本州と北海道を
結んだ北前船がこの入
江を頻繁に利用し、それによって宿場や蔵が
出来、各地を旅してきた船頭たちにより「江
差道分」の唄が定着した。

なぜ北海道新聞社を希望したのかについて、
「地方の現状を見たい、そこに日本社会の課
題があると思うので、北海道か沖縄の
新聞社を希望し、北海道を選んだ。北海道に
は日本産業の原点があり、北海道新聞は地方
紙として大変充実しています」

照井記者は3年間江差支局に勤務した後、
帯広支社に転勤したが、一昨年1月に町の自
営業者らから町長選に出馬して欲しいと要請
された。江差でも人口が減少し若者が流出、
このままでは町は衰退していく。従来のハー
ド面の施策ではなく人や地域づくり等のソフ
ト対策を推進していくフレキシブルな感性を持
つトップが欲しい、と商工者たちは、記者時
代に町内を足繁く歩き、会合にもよく参加し
ていた照井記者に白羽の矢を立てた。

当時は29歳、地域問題に
は関心があるが政治には興
味が無い、晴天の霹靂と出
馬を断ったが、熟慮の末に
立候補を決めたのは「選挙
に出ないで後悔するより、
落選して後悔する方がい

◀住民に江差の未来を託された
照井江差町長。苦勞を隠してい
つも優しい笑顔、行動力も抜群
と職員たちの信頼も厚い



◀江差地域活性化協力隊長の奈良さん
後ろはかもめ島と奥尻島へ向うフェリー



い」ということと、江差への想いだった。「大学時代に神奈川県葉山町でライフセービングをしていて人と人の繋がりの大切さを実感しました。江差の人は自分たちの町を大変愛していて、町の歴史や文化に誇りを持っている。ふるさとにしたいような町が、地盤沈下していくことは何とか避けたいと思った」

選挙の時掲げた公約は「30年後の江差町に責任を持てる町づくり」だった。人口減少や少子高齢化する町を活性化するには2年3年では足りない、一から町を作りあげていくような哲学がいたと思ったという。

新町長に就任した照井町長は、まず「江差町人口ビジョン」を作成、人口が半減するであろう町の将来を皆がしっかり感じること。同時に地方創生、人口減少問題に対応していくための「江差町まち・ひと・しごと創生総合戦略」を策定した。

「若い世代が魅力を持てる町にしたい。江差は檜山地方の商業や官公庁の中心地ですが、現在水産業は低迷、農業も小規模経営で、商業も低迷していて、若い人の雇用の場が足りない。古い建造物や江差追分、芸能文化等は沢山あるが、それが経済発展に繋がっていません。でも沢山の可能性があるはずです。」

ニシンの養殖事業も期待できそうで、幸い新幹線の開通で観光客は2〜3割増えています。で、外国人の誘致にも力を入れています。地域資源を生かして起業をめざす若者やグループ等を手厚く支援する制度を設けました」と町長は、熱い思いを静かに語った。

雇用の場がなければ、起業しようぜ

若い町長の就任を受けて、行動していきこうと動き出した若者たちがいる。江差地域活性化協力隊員たちで、代表の奈良学さん(37)は環境サービスの仕事を運営している。

頂いた名刺には「江差に生まれて良かった、江差に住んで良かった、江差に遊びにきて良かった、江差に帰りたい」と印刷されている。ちづくりを目指します」と印刷されている。

「たまたま若い者たちが集まって、何とかしよう、自分たちが元気で活動していこうと協力隊を結成しました」と奈良さんは言う。毎年7月に開催される「江差かもめ島祭り」、8月に行われる北海道で最も古い祭り「姥神大神宮渡御祭」等の準備や実行を手がけてきた仲間たちだ。8月の祭りには盆帰りを兼ねて同級生が戻ってきて再会するが、今までは「町に帰ってこいよ」とは言えなかったという。しかし機会があったらUターンしようという気持ちを持ってほしい、親たちにも子供に帰れと言えるようになってほしいと切望するようになった。

「地域の活性化というと、どこの市町村も商品開発だ、ブランド化だと言っています、江差にはブランド化する商品の決定打がない。若い人が定住するためには雇用を生む仕事がない。」

あることですが、農林水産業の規模拡大は現状では難しいです。でも何かあるはずですよ。若いニーズを生かせるIT産業、モノづくり、自然環境関連の仕事などを期待したいところですが、企業誘致は無理でしょう。そこでいま、自分で起業しちゃおうかなと考えているところですよ」と奈良さんは含み笑いをしながら語った。

女性の目線を生かして

役場での会議を終えてお会いしたのが江差町商工会会長の赤石智恵美さん。ギフトショップや不動産店を経営している美人ママさんでもある。

「私、函館から北前船関連の仕事をする家に見合いで嫁いできました。海運業を営んできましたが、後に卸小売業に転業した赤石家は主人で7代目で、当時は江差の人口は1万2000人。活気がありました。残念ながら主人は49歳で死去、その間、拓殖銀行や大手建設会社が倒産、漁業の不振、人口の減少と高齢化など、商売することの大変さを実感しながら、店舗を縮小したりして子育てしてきました」

子供も独立した2年前、商工会からは非に頼まれて商工会会長を引き受けることになった。ご主人が商工会の理事をしていたので知人が多かったが、女性の商工会会長は北海道では初めてのことで、女性の視点を生かせるな



▶商工会会長の赤石さん。
経営するギフトショップで

▶蔵を改装してオープンした食事処「皐月蔵チャミセ」
スタッフの布施康子さんと中島晶子さん(右)



▼蔵の前に設けた明かりと写真展示コーナー



等を実施したいと赤石さんは検討している。

歴史が蘇る街で 「よき江差の昔語り」

海岸から一步入った街道は、かつて北前船の終着地として、ニシンや本州からの物品を扱う商工業が発展、商店や旅籠、蔵が立ち並んでいた。160年を経た今も豪商たちが建てた堅牢

な家や蔵が残り、町では町並み保存地区として道路の拡充や電線の地中化、家屋敷の保全再生を行ってきた。「いにしえ街道」と称し、道路の両側には模様替えした民家風建造物が公共施設を含めて百軒ほど立ち並んでいる。重要文化財指定の旧中村家住宅や横山家、北海道最古の歴史を持つ姥神大神宮も街道内にある。

江差町歴史を生かすまちづくり事業に参画し、民家や蔵の改装等を手がけてきたのが中島晶子さん(43)。一級建築士で商業施設のマネジメントをする会社のスタッフとして札幌市から来ていた。「江差町には母の実家があり、祖母が居住していたことから、家族と共に移住してきました。古くて佳きものが沢山あります。蔵や古民家を生かしてモノづくりの街職人さんの街にしたいのが夢です」と中島さんは語る。

3つの蔵を改装して1棟を「皐月蔵チャミセ」という茶房に、2棟を交流施設に活用している。堅牢な青森ヒバ材で作られた蔵は、中島さんの手で磨き上げて改装されて、重厚

な舞台的空間に変身した。皐月蔵チャミセは地元のお母さんが継承する「ふきんこ餅汁膳」「けいらん膳」、珈琲等を提供するほか、女性たちが手作りした装飾品や小物、図書等も扱う交流の場になっている。その奥にある蔵は、天井が高くホッとできるスペースで、イベントや集会等にぴったりに。夏は観光客や子供たちに開放している。

蔵の入口には、地元の竹細工職人が制作した竹籠の明かりが灯り、壁には地元写真家松村隆さんが撮影した、江差のひと昔を語る写真が展示されている。「匠の技を持つ職人さんが大勢いますので、何とか生かして伝承し、商品化もしたいと思っています」と中島さんは言う。最近では観光客が和装で街を散策して写真を撮るサービス事業も人気のような。

別の場所では、再生した空き家で木工教室が開かれていた。木工品の製造販売を手掛ける中島さんのご主人の店で、集まった住民たちがヒバ材のスプーンを制作していた。「教室に通い、将来は椅子や小物入れも作りたい」と参加者の一人が言っていた。

街道の関係者たちは、観光見学だけではなく、町民との会話をプラスして町の魅力を伝えたいと、「江差・百人の語り部」という活動を始めた。観光シーズンには家々の玄関を開けて皆で江差の歴史や暮らしを語ってほしいという



◀追分会館ホールで、尺八奏者の似内さん(左)と正師匠の高清水さん
▶木工教室に参加した人たち。制作したスプーンを持って



赤石さんが経営するギフトショップは、古民家の多い「いにしえ街道」の上段にある商店街にあり、日用品を売るスーパーや老舗の和菓子店、専門店が軒を連ねている。そんな中で、お洒落な食器やアクセサリ、宝飾品を扱う赤石さんの店は、活気を失いつつある街に彩りを添え、女性たちがお喋りを楽しむ場になっているようだ。

この商店街には周辺町村から買い物に来る人も多い。檜山7町の商工会とも連携した商業の振興や商品開発、北前船を巡る旅の企画

▶似内さんの尺八で「かもめの」の基本譜を歌ってくれる高清水さん



う企画で、素敵なガイド誌も用意した。

全国へ発信する「江差追分」

江差町といえば、日本が誇る民謡の王様「江差追分」の殿堂の地。誰もが聴いたことのある唄だが、歌うのが大変難しく、そのために資格を持つ師匠たちが全国にいて指導し、毎年9月には全国大会が開催されている。厳しい資格試験に合格すれば師匠の資格が得られるという特異な世界。役場の隣には「江差追分会館」があり、歴代優勝者などによる実演や資料展示室、指導ルームがある。

正師匠の高清水勲さん(79)が待っていてくれた。高清水さんは北海道開発局在職中に本格的に習い始め、昭和50年第13回全国大会で優勝した。以来講師や師匠を経て正師匠の資格を取得、会館の運営や若手の指導に当たっている。師匠には唄の上手さだけではなく人格豊満、指導者にふさわしい品行、知性が求められるようだ。

「幼い頃から始める人もいますが、最近では姿勢を正し呼吸を整え声を出すことは健康にもいいと定年後から始める人が増えています。皆さんお元気で長生きです」と言っ、似内武雄さん(29)の尺八で「かもめの」の基本譜を独演してくれた。

壮嚴な尺八の伴奏による高清水さんの低めで格調に満ちた歌声は、かもめや波の音が聞こえるようで、なぜか涙があふれてきた。魂の唄とはこういうものなのだろう。27文字のシンプルな歌詞に独特の節まわしを駆使して

唄いあげる追分唄は、一譜を高清水さんは2(3)分で、長い人は5分かけて唄いあげるといふ。荒れる海を行く船のように熱い声を全身で張り上げて唄う若い人もいる。尺八奏者が300人いるというのも驚きであった。

江差追分の起源について、追分観光課主幹の三好泰彦さんが2階の資料展示室に案内してくれ、「起源は諸説あるようですが」と言っで説明してくれた。

それによれば、江戸時代の頃に信州中山道で唄われていた馬子唄が各地に広がり、越後で舟唄として船頭たちに唄われるようになり、

障がい者が快適に働ける職場を

江差福祉会・樋口理事長の取り組み

宿泊したホテルは、社会福祉法人江差福祉会が昨年4月に隣の乙部町に開設したバリアフリーホテル「あすなる」で、知的障がいのある人20人と一般職員10名が勤務している。豪華なロビーとレストラン、2、3階にはゆったりとしたツインルームが20室あり、カードキーで入室、リクライニングベッド仕様。露天風呂もある天然温泉は車椅子でも利用できる。加えて料理は札幌から来たシェフが腕ふるう魚介類をベースにした本格的な中華フルコースで、ご自慢は自家製パン。働く人たちはみな愉し気で、ロビーでは何時でもピアノを弾いてくれる若者の姿もある。このホテルは、障がい者が一般の人と交流しながら働ける場を、地元化粧品会社所有の建物を7億5千万円かけて全面改装したもので、樋口英俊理事長は「私はこの世界に入って36年になりますが、障が

やがて北前船と共に江差にやってきたと言う。江差では座頭佐之市が「けんりょう節」と追分を独特の音調に仕上げ、さらに多くの歌手たちが磨き上げてきた。

毎年9月には一般・熟年・少年の部に分かれての全国大会が開かれ、300人が参加。吹雪舞う2月には正師匠による指導塾で150人が訪れるほか、10月末まではホールで月3回実演会も行われている。

百年以上の時を経てなお人々を魅せる江差追分の凄さを、肌で感じた取材でもあった。

文/浅井登美子 写真/小林恵

して全国で市販されている。現在、360人の知的障がい者と職員160人が働く事業所を運営するまでになった。パン工場で働く人が月15万円の給与を得ているというから、地方では一般人並みの水準だ。「障がい者の可能性を見守っていく」という樋口理事長の挑戦はまだ続く。



▲左/ロビーでお客様サービスにとピアノを弾く若者
右/レストランで食卓係をする女性たち
▼バリアフリーホテル「あすなる」。積雪のため、皆が早朝から除雪に追われた
●ホテル「あすなる」☎0139-62-3344

▼障害者福祉の夢を語る樋口理事長



- 江差町まちづくり推進課 ☎0139-52-6712
- 江差追分会館 ☎0139-52-5555
- 皐月蔵チャミセ ☎090-7656-5473
- 社会福祉法人江差福祉会 ☎0139-52-5577
<http://www2.ocn.ne.jp>

豊かな自然を生かして

房総「山のまち」に賑わいを

地域おこし協力隊も参加して

清澄地区と四方木地区は、共に人口1000人以下、高齢化率約50%という過疎地域である。鴨川市による「清澄・四方木地区活性化事業」が始まったのが平成25年度。目的は、過疎化が進む両地区に、定住や交流をする人口を増やし、地域に賑わいをつくり出すことだった。

まず「清澄・四方木地区活性化懇談会（以下、懇談会）」が地元住民らで組織された。現地調査などで地域の課題を探った上で、地区内外の市民参加によるワークショップや地区懇談会を、平成25年度から26年度にかけてたびたび開催。そこでの意見をもとに、具体的な事業内容・手法・スケジュールなどが決められた。なお、ここまでの準備段階での事業費には過疎債が充てられている。

平成27年5月、懇談会は「清澄・四方木地区活性化協議会」（以下、「協議会」）へとステップアップし、いよいよ各種事業がスタート。まず、外部の人材に地域協力活動を行ってもらう「地域おこし協力隊」を市が募集。2名の隊員が決定し、現在、清澄・四方木のそれぞれを担当して地域の人々と協力して活動を行っている。また、鴨川市にある城西国際大学観光学部とコラボレーションを行うなど、



▶四方木地区での伐採体験。「チェーンソーは初めて」という参加者たちが、専門家の指導でヒノキの伐採を行った

房総半島の南部に位置する千葉県鴨川市。観光スポット・鴨川シーワールドや中心市街地が臨海部にあるため、太平洋が眼前に広がる「海のまち」のイメージが強い。しかし北側に一歩入れば、深い山林や美しい棚田の風景に出会うことができ、「山のまち」でもあることに気づく。今回、地域の活性化事業を取材した清澄・四方木地区も、そうした山間部にある。隣り合う両地区で進められているさまざまな取り組みを紹介する。



千葉県鴨川市
清澄・四方木地区

▲清澄地区の活性化に取り組む協議会の田中重郎さん、地引勇司さん、村尾佳子さん(右から)
▶上/清澄地区を担当する地域おこし協力隊員の鹿野光久さんと妻の有紀さん
下/日蓮上人が仏門に入り、日蓮宗を開いた古刹・清澄寺と千年杉



◀懇談会に集まった清澄地区のメンバー。清澄寺の代表者も交えて活動の詳細について意見が交わされる

地域・学・民・官一体で地域活性化が進められてきた。

花と星があふれる「癒しの空間」へ 清澄地区の取り組み

清澄地区は、日蓮上人ゆかりの古刹・清澄寺の門前町として、また建具や細工物など木材加工の集落として、古くから栄えた地域だ。しかし現在は木材を扱う職人も減り、寺院の参拝者も減少。門前に並ぶ土産物店なども今はほとんどが店を閉めている。30年前には約50世帯あった集落も、今や20数世帯にまで減ってしまった。

車でわずか15分の海岸通りから賑わいを呼び込むには何が必要か——そのことを検討した結果、清澄地区の協議会メンバーがたどり着いた答

えが、

「花」と「星」だった。地域の四季折々の花の美しさ、澄み切った夜空にまたたく星の美しさに活路を見出したのだ。「清澄をユリの里

に」と、平成27年2月、清澄寺に隣接する仏舎利塔の前の斜面に34種・13000個のユリの球根がメンバーとボランティアの手で植えられた。満開となった6月には「清澄ユリ鑑賞会」を開催。これに合わせて、清澄を舞台としたフォトコンテストや開運スポットのスタンプラリーも実施し、約500名の参加者を集めた。

ユリ以外には、桜の木を平成27・28年で合計300本、清澄寺境内をはじめ清澄地区に植えている。この「花」のプロジェクトについて協議会副会長の田仲重郎さんは次のように語る。「春先の桜から始まり、従来からのツツジ、そして初夏のユリと、清澄が花で彩られることで、癒しの空間を地域につくりたいと考えています。また、ユリは現在、畑での栽培も進めていて、切り花として出荷して収益を生むことも見込んでいます」

また、「星」については、標高300㍍350m付近にあり市街地からやや離れた清澄地区は、星がきれいに見られることから、地元「鴨川市に天文台をつくらう会」と「NPO法人鴨川未来倶楽部」の協力の下に「星の観察会」をこれまで3回開催。そのうちの一回は「清澄★星フェスタ」と銘打って、清澄寺に移動式プラネタリウムを持ち込んだの上映を行って約800人の来場者を集めた。加えて、地域おこし協力隊員が門前町再生の一助として、空き店舗の一つを自身の活動拠点として活用しており、土・日・祝日には旅行者や寺の参拝客向けに「きよすみ観光案内所」を開設し、清澄の案内とPRを行っている。

この場所は、月2回の地区懇談会の会場と

もなる。懇談会には、協議会の清澄地区メンバー、区長・各隣組長、地域おこし協力隊に加えて、清澄寺の代表者も出席。協議会の各事業について詰めたり事業の進捗を報告したりするが、特徴的なのは、清澄寺の行事予定も報告され討議に加わることだ。このあたりに「清澄寺と共に繁栄していく」という清澄地区の基本姿勢の表れを感じた。

パンフレットやマップの作成と配布、地元の自然や昔話の紹介など、清澄地区で精力的に活動する地域おこし協力隊員の鹿野光久さんにお話を伺った。

「房総地域のことはあまり知らずに東京から来ました。自然の豊かさ、美しさに魅了されています。地元の地域性について勉強中ですが、旅行者や地元の方とお話することで、活性化のためのヒントをいろいろともらっています。都心から車で2時間足らずですし、東京湾アクアラインでもアクセスしやすいので、都会の人にぜひ清澄の魅力を知ってほしいですね」

清澄地区での活性化事業は緒についたばかりといえる。しかし、懇談会を見させていたでいて、地元の人たちや地域おこし協力隊員の「やる気」は並々ならぬものと感じた。この先、皆さんの努力は、まさにユリのような大輪の花を咲かせるに違いない。



◀協議会メンバー等が手作業で球根を植えるなど整備を行ったことで、清澄地区の一角に見事な「ユリの里」が出現した(平成27年6月撮影)

豊かな自然資源を活かして ——四方木地区の取り組み

清澄地区からさらに北へ入った君津市との境にあるのが、四方木地区。主たる産業だった林業の衰退とともに人口の流出が進み、現在は30世帯程度の集落となっている。

いかに魅力的な地域をつくり、情報を発信して、地域に移住者を呼び込むか——そのために、活性化事業開始当初より、四方木地区の協議会メンバーや地域おこし協力隊員は取り組みを行ってきた。

「四方木の魅力はなんといっても豊かな自然。自然の美しさやそこからの恵みをアピールして、まず四方木という地域を知ってもらいたいと考えています。また、山間の地域ですが決して閉鎖的でなく、誰でも歓迎する住民の『人の好き』も魅力。ぜひ、その良さを知ってもらいたいですね」

そう語るのは、四方木地区の区長であり協議会の副会長でもある神作利幸さん。四方木の地域活動の中心人物だ。説明していただくまでもなく、取材時、紅葉がピークを迎えつつあった自然の美しさは十分に実感できた。

取材当日は、地域活動の賛同者と共に、今後の体験イベントを模索・検討する活動「よもぎday」の第3回目。この日は「森林資源の活用」をテーマに、専門家の指導により、木の伐採体験とスウェードントーチ作り、さらにチェーンソーアートの実演などが行われた。第1回は地域名にちなんだ「ヨモギ」の葉のスイーツ作り、第2回は房総特有の「川廻し」(川の屈曲部をトンネルで短絡させた場

所)の見学と、「よもぎday」にはいずれも四方木の自然を題材にしたプログラムが企画されている。

また、四方木の自然が満喫できる企画として、「フットパスwalk」も行われている。これは、森林や田園地帯などの風景を楽しみながら歩く英国発祥のレクリエーションで、これまで四方木で2回開催された。すでにリーダーもついており、今後は移住者として想定している子育て世代をターゲットとしたプログラムを検討するという。

四方木地区で、住民らと協力しながら地域おこし協力隊として活動するのが、橋詰良子さん。ホームページを通じて四方木の情報を発信したり、さまざまなイベント企画を立てたりするなど、外部の人を四方木に振り向かせる仕掛けづくりを進めている。

「移住先に選んでいただくために、まずは、イベントやSNSなどで四方木の魅力をアピールして来てもらうこと。さらに次の段階として、1回の訪問で終わらずに通っていただける仕組みが必要と考えています。そのために、今春、地域の方たちとともに、空き家のDIYリノベーションや野菜栽培が体験できるコミュニティを立ち上げる予定です」と橋詰さん。ちなみにこの橋詰さんも、清澄地区担当の地域おこし協力隊員・鹿野さんも、これまでメディア関係の仕事をしてきたとのこと。地域の魅力の掘り起こしや情報発信には、うってつけの両名とお見受けした。

今回、試行錯誤をしながらも、四方木地区の皆さんがそれぞれ楽しそうに活動しており、またイベントを楽しみにしている人もいて、



▲「よもぎday」での、参加者がチェーンソーを使ってのスウェードントーチ作り
▲上/「木」は、四方木地区活性化のための貴重な資源。地域おこし協力隊員の橋詰さんも参加者と共にイベントを楽しむ下/四方木の山の幸を代表するイノシシ肉などに舌鼓

地域に新たな活気が生まれつつあるのを感じることができた。しかし、今後の継続的な活動を考えるときに、資金確保という問題も生じてくるという。

「地域の資源をどう活用して収益に結びつけるか。幸い、山や畑からの恵みは豊かなので、それらをビジネスにつなげられないかいろいろと検討しているところです」と、神作副会長は語る。

ちなみにこの日、炭火で焼いた地元産イノシシ肉のタレ漬けと燻製を頂いたが、肉に旨味があり大変おいしかった。狩猟に頼るため「商品化は難しい」が、その味わいに触れたとき、四方木の自然の恵みの豊かさを知った思いがした。

文／加藤伸一 写真／小林恵

- 清澄・四方木地区活性化協議会事務局(鴨川市企画政策課)
☎04-7093-7828
- 清澄地区ホームページ(<http://www.kiyosumi.info/>)
- 四方木地区ホームページ(<http://yomogiyomogi.jp/>)
- 鴨川市地域おこし協力隊facebook
(<https://www.facebook.com/kiyomogi/>)

多摩川源流の隠れ里

「小さな村g7サミット」を誕生させた村

山梨県丹波山村
たばやまむら



▲村まるごとが秩父多摩甲斐国立公園という丹波山村



▲試食希望者の列が続く大人気の料理コンテスト



▲ヤマメの揚げ団子



▲落合芋のニョッキ



▲シカ肉のアヒージョ



▲そば・シカ肉たこ焼き



▲大人も子供も大喜び。会場となった道の駅で

東京と山梨のほぼ県境。深い山あいに拓けた小さな村に、「ニョッキ」や「アヒージョ」、イタリア料理の香ばしい匂いが立ち込めた。おしゃれな料理が並び各テントには人々の行列が絶えることなく続き、この日の料理コンテストは晴れやかな賑わいのうちに終わった。昨年5月には、日本全国7つの小さな自治体を集めて、「小さな村g7サミット」を誕生させたこの村は、人口600人の山梨県丹波山村。「小ささこそが、発信力」と考える丹波山村の、ユニークな発想と活動が、面白い。

調理学校生による料理コンテスト

山梨県丹波山村は東京のすぐ隣。新宿追分を起点とし、多摩川沿いに青梅、奥多摩を経て、山梨県の大菩薩峠、塩山へと続く青梅街道を走れば、迷うことなく着いてしまう東京にいちばん近い村だ。とはいっても、地図を眺めれば2000mを越える険しい山々に隣接した山峡の地。村の97%は山林という山の中だ。この日、村の中心部の道の駅で行

われたのは、東京の調理専門学校の生徒らによる料理コンテストだった。生徒をグループ分けし、村の食材を活かしたオリジナル創作料理を競うもので、コンテストは3年目を迎える。

そば粉とシカ肉を使ってたこ焼き風に焼いたそば粉のシカ焼き、シカ肉のロールキャベツ、丹波山村特産の落合芋入りバナナプリン、そしてシカ肉入りカレーパン、ヤマメの揚げ団子、落合芋のチーズボール、落合芋のシフォンケーキ、シカ肉のア

ヒージョ、落合芋のニョッキなどなど、人気レストラン顔まけの独創的で、レベルの高い料理が並んだ。

白衣にブルーのタイが映える各テントの生徒たちは、試食を求めて並ぶ来場者たちに応えようと、大車輪の活躍で腕を振った。出来上がった料理はどれも美しく、食欲をそそるもので、日頃の腕と若者の感性が光る見事な一品ばかりだった。

試食した来場者たちは、会場内に設置されたパネルに評価シールを貼っていく。



▲道の駅に並ぶ豊富な新鮮野菜

理は「誰でも家庭で簡単に作れるものを」と生徒らが工夫し、全ての料理にカラー写真入りレシピが付けられ配布された。最後に生徒たちから料理の説明や苦勞話が披露され、集まった村の人々や来場者からは「アリガトー」と、労いと感謝の思い溢



▲若い感性が光る独創的でオシャレな料理が、次々と出来上がる
▼村長、大学教授、商工会・観光協会、議員各氏らの審査風景

審査員は村長始め東京農大の先生や、商工会、観光協会、議員各氏らで、試食を楽しんだ後は、早速レストランや販売所などでこの料理を活用していこうと、意欲をみせた。当日作られた料



結ばれた水源の村と河口域のまち

れる熱烈コールが飛び交った。

この日の料理コンテストは東京大田区の料理専門学校「日本調理アカデミー」の生徒らによるもので、学校は東京湾の近く、多摩川の河口域に建つ。この多摩川河口域というエリアに、コンテストを仕掛けた村の想いが込められている。

丹波山村に地域おこし協力隊員として3年前に移住し、活動を続けている小村幸司さんが、そのこだわりを話してくれた。

「村の面積の97%が山林という丹波山村ですが、その7割は東京都民の水がめである水源涵養林なのだとい



▲都民の水がめとなる多摩川源流と水源涵養林
▼丹波川沿いの傾斜地に点在する集落は民話の里のような佇まい
▼「小さな村g7サミット」を立案した地域おこし協力隊員の小村さん



うことは、案外知られていません。そのことをもって知って欲しいこともあり、多摩川流域を繋ぐ活動として、水源の村と河口域の学校を結びました」
今年で3年目になるこのコンテストだが、今回のプロジェクトリーダーである埜野剛さんは、かつて調理アカデミーの生徒として丹波山村にやってきた。そしてこの村に惹かれ、地域おこし協力隊員として丹波山村に移住。いずれここで蕎麦屋を開くことを夢見ながら、現在は協力隊のメンバーとして活躍中だ。
こうして人と地域が有機的に繋がっていく。こんなことが「何より嬉しいことです」と、先輩格の小村さ



んは笑顔を見せる。「都民の皆さんには、自分たちの水がめであるこの森をもっと知ってほしい。多摩川を遡って、水源林巡礼をされることをお勧めしますよ」と、小村さん。

「小さな村g7サミット」の開催

丹波山村は平成28年5月に日本全国の小さな自治体を集めて「小さな村g7サミット」を開催した。伊勢志摩で開かれた「G7主要7カ国首脳会議」を彷彿とさせる開催名だが、こちらは小文字の「g7」。

日本全国7つに分けたブロックから、いちばん小さな村の村長が集まり、互いの課題や施策を話し合い、強力な連帯感の中、相互に知恵を出し合い、人口減少などの試練を乗り越えていこうと共同宣言を發した。7つの参加自治体は北海道音威子



▲「小さな村g7サミット」に参加した村長たち。左から、音威子府村・佐近勝村長、檜枝岐村・星光祥村長、丹波山村・岡部政幸村長、北山村・奥田貴村長(当時)、新庄村・小倉博俊村長、大川村・筒井誠副村長、五木村・木下文二副村長
▼7村が持ち寄った特産品が展示販売された



府村、福島県檜枝岐村、和歌山県北山村、岡山県新庄村、高知県大川村、熊本県五木村、そして山梨県丹波山村だ。いずれも人口1000人足らずの小さな村だ。

「限界集落」「消滅可能性自治体」などという言葉も聞こえる時代にあつて、小さくともしっかりと自立した村が、互いに連帯しあつて歩んでいこうというこの素晴らしい企画を發案したのは、丹波山村地域おこし協力隊一年目の小村幸司さんだった。小村さんは面白い経歴を持つ。熊本県出身で長崎大学卒業後は2年間の銀行勤務。その後は映像ディレク

ターとして東京で活躍。テレビ番組の取材で東北の林業家を取り上げたことがあり、「50年後、100年後」という経済活動があることに衝撃を受けた」という。

映像の世界でも50年、100年後を睨んだ仕事が出来たらと考え始めた矢先、地域おこし協力隊の存在を知り、さらに山梨県丹波山村が地域おこし協力隊として、ケーブルテレビ用の番組制作者を探しているという情報にも出会った。

丹波山村には300年以上も続く伝統の獅子舞や、祭事など、村独自の貴重な風習が沢山あつた。じっくりとそんな暮らしを記録してみたいと、東京の仕事を整理し、3年前に移り住んできた。

「小さな村」という考えは、「昔取材で知り合つたインド人が、小さなコンピュータを沢山繋ぎあわせて、大きなスーパーコンピュータに負けないものを作ろうと挑んでいたのですが、その発想にひどく刺激され共感を覚えました。」

小さい故の自由さ、しなやかさこそが、大きな可能性を孕んでいると考える小村さんだった。

100年続いたのだから、今後100年も生き残ろう

「小さな村g7サミット」では早速新しい提言が生まれた。

全国で人気の「ふるさと納税」に、共通のサイトを作ろうと北山村から7村によびかけた。

他にも「7つの小さな村暮らし方マガジン」という小冊子を發行した。これはそれぞれの村に移住した人々からの、移住に関する実践的なアドバイスや、知りたい情報が満載された冊子だ。小さな村の魅力と現実がいガイドブックとなつている。

丹波山村の岡部政幸村長はいう。「小さくとも100年以上も続いてきた村を、無くす訳にはいかない。100年先も知恵を出し合つて、生き残つていきましょう」

「小さな村g7サミット」では、参加した全ての村が、同じ思いでこの力強い宣言を發した。

次の「g7サミット」開催地は福島県檜枝岐村に決まった。平成29年5月26日〜28日に都市との交流をテーマに開催する。小さな村の連携の力が、今後どんな産物を生み出すのか、期待したい。

丹波山村では小村さんたちが、地域おこしの拠点となるべくNPO法人「小さな村総合研究所」を立ち上げた。自家用車による有償旅客運送事業、林業を通じた体験型観光、都市との交流事業、特産品開発等をめざして忙しい日々が始動している。

文／片桐淑子 写真／満田美樹

群馬県南牧村星尾地区

ゆっくりにのんびり、秘境タイム 山里の暮らしを学び、支援する



▲山際の斜面に広がるサツマイモ畑



▲高崎市から参加した家族に指導する米田さん(右)



▲屋食は作業場2階で。日差しや風が心地いい

美しい渓流、急斜面に築かれた石積みと頑丈な木造住宅、斜面を耕して生産してきた蒟蒻芋やネギ。過疎化が進む南牧村だが、奥まった西北部に位置する星尾地区は、さらに過疎化が顕著で、住人の大半は高齢世帯。しかし田舎暮らし志向派にとって、日本の原風景に出会える魅力いっぱい山里で、一タインした人たちが地区の核になって活動しはじめている。秋日和の土曜日、星尾地区と交流を続けてきた「南牧村に学ぶ会」の、切り干し芋づくりプロジェクトによる芋ほり会が開かれた。

南牧村は総面積118.8km²で90%が山林原野。南牧川沿いに集落が形成され、その支流に沿って8つの集落がある。人口1979人、953世帯(日28年10月)で、若年層の定住率が少ない。そのため平成26年日本創成会議が発表した消滅可能性都市のナンバーワンに南牧村が指定されてしまった。現在20〜39歳までの女性は約100人だが、2040年までに10人になり、人口も626

消滅してたまるか!

へ出る。星尾川の渓流沿いの斜面に石垣が二重三重に組まれ、その上にとっしりとした木造家屋が建ち並んでいる。集落の中心部に米田優さん(69)が経営する交流拠点&民宿「かじか倶楽部」があり、その先に芋ほり会の会場となる掛川孝さん(81)の家があった。木造二階建ての大きな母屋と作業場があり、畑はその先の緩やかな斜面。高崎から来たという若者や子供連れ家族など約20人が朝9時頃から作業を始めていた。

人になると予測している。事実、村の空き家は360軒に達し、5軒に1軒が空き家になっている。この予測に住民や若者は猛反発、消滅してたまるか、しぶとい南牧村の意地を見せようと、地域おこしに燃えだしている。賑わっている村の中心街を過ぎ、南牧川に注ぐ星尾川に沿って右手に上がっていくと、星尾地区

▼右/力仕事に精出す高崎市から来た若い会社員。芋は蒸し干しして干し芋にする
左/左から[南牧村に学ぶ会]の発起人・菅原さん、レストラン「せせらぎ」の高野さん、農家・小保方さん、[学ぶ会]会長の廣瀬さん、「かじか倶楽部」の米田さん



春に「南牧村に学ぶ会」(以下「学ぶ会」)の、切り干し芋づくりプロジェクトが植えたサツマイモの収穫会で、芋はタマユタカという白っぽい色の品種。蒸して切り、寒風に干すことで、独自の甘みと歯ごたえのある干し芋が出来るといふ。「今年は天候不順に加えて、鹿とイノシシが葉を食べたので、芋の成長が悪いんです」と「学ぶ会」会長の廣瀬義征さんが嘆く。藤岡市に住んでいるので、毎月のように星尾通いを続けている。作業場の1階に炉と大きな蒸し器、

筑等が用意されており、後日に米田さん、移住してきて農業をする小保方努さん、廣瀬さんらが切り干し芋づくりをするという。

作業は午前中で終了、作業場の2階で昼食会となった。昔から蒟蒻芋の保存や養蚕に使ってきた広い堅牢な木造建で、風が心地いい。レストラン「せせらぎ」が用意した手作り弁当のおいしかったこと。あとで珈琲を飲みを訪ねることにした。

「南牧村に学ぶ会」は、地域問題をテーマにした隔月刊誌『かがり火』（本社／東京都千代田区）の発行人・菅原敏一氏が「かがり火」一五八号で南牧村を支援しようと会員募集を呼びかけた。会員に応募した関東在住の読者が平成27年3月に南牧村で準備会を開催、7月20日に発足した。

東京を早朝に出て参加した菅原さんは、「南牧村は何もない村です。歴史的な名所旧跡も温泉も、記念館や美術館もない。しかし急斜面に築かれた石積みみの畑や古民家など、懐かしい山村の原風景が残っています。この地で山や畑仕事をしてきたお年寄りや誇りと郷土愛を持っている。そんな村に魅せられて移住した人たちが、いまは地区の年寄りを支える役割を担っている。我々も南牧村に学び、支援していきます」と語った。33戸あった星尾地区は現在18戸になっている。

蒟蒻芋は「ここ」が発祥地だった

畑や作業場等を新規就農者や交流の場に提供している掛川さんは、星尾地区一番の大農家。畑を中心に16町歩を耕作していたという。

「ほら、向こうの山のスギ林、あそこも昔はうちの畑で蒟蒻芋を作っていたね。ここは蒟蒻芋の原産地で、下仁田ネギも早くから栽培していた。こちらの農家が大きくなって立派なのは冬に芋を寝かせるためで、戦後は養蚕もやっていた。斜面で大変だったけれど、日当たりがよく土壌が良かった。でも蒟蒻芋は、平地で栽培するように品質改善が進んで、別の産地が伸び、南牧では年を取ってきて辞める農家が増えてしまった」

掛川さんの言う農地は、家々が立つ背後の山々のさらに上部の一角で、緑豊かな杉林が広がっている。そこまで畑だったのかと驚かされる。その下方はいまも畑地帯と思われるが、雑草が覆っている。

一昨年奥さんを亡くして一人暮らしになってしまった掛川さんだが、家屋敷の周りでは野菜や草花をいっぱい育てるバリバリの現役。3年目という蒟蒻芋を見せてくれたが、初めてお目にかかる巨大玉だった。

移住してきて農業をする人に、五十嵐亮さん(36)がいる。五十嵐さんは3年前に神奈川県からIターンし

てきて「自然農園まほらま」を運営、道の駅等でも野菜を売るベテラン農家になっている。平成26年10月には、「かがり火」菅原さんの提案で、読者でもあるトヨタ財団の国内助成担当者も南牧村に案内し、五十嵐さんと古民家を利用して「ちよつとカフェ」を開いている加藤有希さんに会ってもらった。二人が中心になって作成した「農村カフェ計画」をトヨタ財団に申請したところ、審査が通ってトヨタ財団が498万円を助成してくれることになった。これを機に、南牧村再生作戦を発展しようと「学ぶ会」の活動が本格化した。

山里に残る希少な歴史・風土の保全

空き家調査を行ってきた南牧村暮らし支援協議会では、空き家を改装して都市住民や移住者に貸し出す「空き家バンク」に力を入れている。



▲大きな蒟蒻芋を手にする掛川孝さん
▼小保方さんと隣りに住む押川貞さん

小保方さんが今年春から住んでいる家も村が改装した家で、南向きの高い場所であるため一日中日当たりがいい。玄関を入ると、木の香がする囲炉裏付の居間と近代的な台所や洗面所があり、奥に8畳間が2部屋ある。2階は40畳程もある大広間に改造され、天井が高いため、ちよつとしたイベント会場の雰囲気だ。いづれ仲間との交流会やミニコンサート会場にしたいと小保方さんは言う。4年前に太田市から移住し、古い民家を借りていた小保方さんにとって「ここは新築同様の家。家賃は内緒、とても安くしてもらっています」

この家は隣接する押川貞さん(89)宅と長屋続きで建てられており、一人暮らしをする貞さんにとって、心強い隣人が出来た。

「小保方さんは野菜を届けてくれたり家周りのこともしてくれます。息





▲民宿「かじか倶楽部」は元酒屋の古民家を活用。匠の技が駆使された2階の客間

子が高崎から月2、3回来るが、安心して帰っていきます」と言う。

星尾地区の中心部で古民家民宿「かじか倶楽部」を営む米田優さん(69)夫妻は千葉県松戸市の出身。25年ほど前から南牧村が気に入ってよく訪ねてきていたが、地区で酒屋を営む家主から「店を畳むので米田さん、住んでくれないか」と言われ、米田さんは即OKし、平成17年に移住してきた。大工仕事がプロ級の米田さんは、元家主が贅を尽くしたこだわりの建物を保存すると共に、この地区に宿泊施設がなかったことから改装して、来た人が会食したり宿泊できるサロン兼民宿に再生した。

1階は囲炉裏のある広い居間兼食事処、その奥は地区の資料や写真、住民が自由に利用できる本や雑誌を揃えた資料室。奥には和室の宿泊室がある。かつて酒蔵室があった地下

は大改装して、お洒落なバーを設け、粋なバス・寝室ルームも備えた。地下階からは目の前に星尾川の渓谷美が眺められる別天地でもある。

さらに「かじか倶楽部」ご自慢の特別室が絢爛豪華な2階の和室。40畳の総ひのき造りで、障子、欄間、床の間等、職人の技がますますとろなく駆使されている。「一流旅館の特別室といった雰囲気でしょ」と米田さんが説明してくれていると、今日宿泊するという男性客が2人ここにこして現れた。芋ほりの参加者で、「今日はここの宿を満喫し、明日芋ほりをします。米田さんが栽培した野菜や季節の手料理が最高ですよ」と言う。

地区運営を担い、高齢者や都市住民から絶大な人気がある米田さん。これからの地域活動について聞くと、「南牧村民は地区ごとの結束は強いが、全体で取り組もうという姿勢が足りない。特に村人口付近の平地に住む人たちは、奥に石積みや古民家の貴重な歴史文化の集落があることに関心を持たず、東京の方ばかり向いています。祭りやイベントを盛り上げて住民の交流を深めていく必要があります」と語った。

廃校を交流・憩いの場に

星尾集落への入口の手前、小高い場所に建つ旧尾沢中学校。ここで今



▲石窯でピザを焼く高野シェフ
▶高台の森の中に建つ廃校となった中学校

年4月に美人3姉妹が農家レストラン「せせらぎ」をオープンした。珈琲と石釜で焼くピザ、地元産にこだわった季節料理を提供している。南牧に移住してきて店を運営するのは長女の高野さつきさんとお母さん。妹たちは高崎市に住み土日だけ手伝いに出かけてくる。

「南牧には親類があり、子供の頃から遊びに来ていましたので、この自然の中で地元の食材を使ったレストランを開きたいと思ってきました。いまは土日だけ開店していますが、

▼農家レストラン「せせらぎ」を開業した高野さん一家



頼まれれば平日でもお弁当を作って届けるようにしたいと準備中です」と高野さんは言う。女性のセンスを生かして手作りのスカーフやバッグ、お洒落小物も販売している。

広い校庭や懐かしくレトロな校舎廊下は、子供や親子連れの遊び場としても恰好で、遠くから訪ねてくる人が徐々に増えているようだ。また、別棟の校舎は一部が工作・絵画等の体験教室、各種団体の打ち合わせ会場に活用されているが、未整理の教室もあるため、今後はさらに整備し、新たな交流拠点にしていく計画だという。文/浅井登美子 写真/小林恵

豊かな
農業大地へ

宮農を支援し、米加工品で付加価値を 日本一を誇る「土佐天空の郷」棚田米

高知県本山町（二財）本山町農業公社
もとやまちょう



吉野川南岸の幾つもの支流を水源に、急峻な土地を切り開いて耕作してきた本山町の「土佐天空の郷」は100%が棚田米。土壌を肥やし、森の有機質な水と溢れる太陽、寒暖の気温差を生かして育てたお米は昔から「美味しい」と称され、品評会で何度も日本一に輝いている。町では農業公社を設立し、高齢化で耕作管理の難しい農地の保全、「土佐天空の郷米」のブランド化・品質管理を徹底してきた。お米の付加価値を高めるため、米粉、焼酎、グラノーラ等の製品開発にも力を入れ、六次産業化に取り組んでいる。

棚田を保全してブランド米へ

本山町は四国のほぼ中央に位置し、町総面積134.21km²の91%が山林。町の中央部を吉野川が蛇行しながらゆつたり流れている。河川沿いは木材の集積地として繁盛、杉や樺の大木が吉野川を利



▲上／見渡す限り棚田が耕作される大石地区
下／土佐天空の郷米と加工品

用して運び出され、大阪城建設の一翼を担ったという。人口3524人、高齢化率は41%に達している。

本山町農業公社（以下「公社」）は、全国でもいち早く平成6年4月に農林業を中心とした地域づくりを進めることを目的に設立され、農作業の受委託や育苗事業を中心に行ってきた。平成25年には公益法人制度改革に伴い農地利用集積事業と農作業委託の公益事業と育苗事業、特産品普及等の収益事業を目的として一般財団法人に移行した。事業費のうち1400万円が過疎債で充当されている。

公社は町の中心部に近い北山東地区という河岸段丘の一角にあり、事務所隣接してライスセンターと種苗センターが建設されている。迎えてくれたのは本山町まちづくり推進課から派遣されてきて10年になる和田耕一理事と公社事務局次長の真辺祐也さん。会議室の一隅には、土佐天空の郷米、米せんべい、甘酒、グラノーラ、酒類等の加工品が沢山置かれている。

これらの加工品の中には平成26年7月に製造業社・生産者等の各関係団体による「そえちやおプロジェクト」を設立し、約50人のメンバーにより特産品開発を協議して生まれたものも多く並ぶ。

「吉野川近くの河岸段丘には縄文・弥生時代

▶町の中心部は滔々と吉野川が流れる、棚田は南部の段丘地帯に広がる





の遺跡が沢山発掘されていますが、標高400m以上にある棚田を耕作した歴史もかなり古く、室町時代には水路の開鑿をしたと記録されています。道路と水路を作り、土手を築いて田を作り、溜池も掘った先祖たちの努力は大変なもので、今も農家の後継意欲は高く、皆さん熱心です」と和田さん。棚田米生産農家は37戸、殆どが専業農家で、米以外に林業、畜産、園芸、シイタケの原木栽培など複合的な経営をしているという。

特に広大な棚田エリアを持つ吉延地区は、農家が結束して棚田を保全してきた。それでも高齢化等で耕作を放棄する人が出てきたことから、平成19年に集落営農組合を設立して、空き田を集落営農組合が借り受けて耕作し、草刈りや水管理等を共同で行っている。

穏やかな斜面は見渡す限り棚田

和田さんと真辺さんが棚田へ案内してくれた。吉野川南岸の丘陵地が水田地帯で、街中を抜けると昔ながらの狭い道路の両側に農家らしい家々が立ち、その先は水田地帯。緩やかな斜面に見渡す限り大小の棚田が広がっている。中には急峻な地形を活用した猫の額ほどの田もある。残念ながら稲刈りも終わって、黄金色に輝く里山風景を見ることは出来なかったが、里山は場所を変えるごとに異なった表情を見せる。収穫を終えた台地には穏やかな休息の時間が流れている。

町は土佐天空の郷米が生産される棚田風景や清澄な汗見川の環境を「日本で最も美しい村」宣言をして、全町的に地域資源を将来にわたって活かす保全する取り組みを行っている。「ここは石垣がなく自然の土壌を生かした棚田で、殆ど圃場整備をしていません。改修すると道路や土手は広くなるが水田面積が減ってしまうので、現状のまま管理するしかありません。土手や畔の雑草刈りが大変ですが、草は田圃に入れて肥料にしています」

町では給水路の管理・整備の他、イノシシ等の被害から稲田を守るため、耕作地の周りをすべて獣害対策用柵を設置している。景観を重視して人目に付きにくい林の中にあり、その長さは約23kmにも及んでいる。

大石地区を見下ろす場所に展望台があり、さらに杉林等を抜けて登って行くと、クラインガルテンが10棟立つ小高い丘に着いた。山頂の広場に管理棟があり、管理人の中井勇介さんが空き家になっている家へ案内してくれた。地元材で建設した菜園付き30坪はある木造住宅で、各家からは棚田が眼下に見ることが出来る別天地だった。

私らが日本一美味しい米を作る

吉延地区営農組合の人たちが組合の共同作業施設に集まってくれた。和田さんが急遽高井豊歳会長に連絡したところ、代表者の方々が

が仕事の手を休めて駆けつけてくれた。公社と農家の連携ぶりが伺える。施設には乾燥機と籾摺り機があり、地区のお米の殆どはここに集まるが、土佐天空の郷米は公社に出荷し、検閲を受けて、印章ラベルを付けることになっている。

「吉延地区の水田開発は古く、室町時代には多くの棚田が存在したと記録されています。明治になり耕地は農民に開放され、一時は米の他に麦やカライモを作っていました。本山で一番貧しい地区と言われましたが、ここまで来れたのは皆が協力して努力してきたからです」と高井さんから説明を聞いてみると、田岡勇二郎さん(42)が駆けつけてきた。

吉延地区で一番若い農業者だと言う。「父が早くに亡くなったので引き継ぎました。林業等をやりながら生計を立てています」と苦笑する。

間もなくやってきた田岡清さんは、「日本一」を受賞した米農業の名士で、2010年に静岡で開催されたコンテストで日本一に輝いた。当時の記事が事務所の壁に貼ってあり「397点応募の中からトップに輝いた」と記されている。以来毎年のように優良米の特選に選ばれている。「棚田30ha、60枚を耕作しています。一番小



◀吉延地区営農組合の人たち。前田夫妻が飼育するあかうし牛舎で
▶山頂近くにあるクラインガルテン



さい田は0.5aで、コンバインが回れないので、バックして作業しています。小さい田でも手抜きせず施肥と手入れをきちんとして加えて、公社が開発した海洋深層水の散布が効果的で、旨みと甘みのある質のいいお米が出来ます。さらに公社がセンサーで粒の大きさ・色を厳しくチェックして厳選していることです」と語る。

事務所のすぐ上には前田博・昭子さん夫妻が飼育する土佐あかうしの牛舎があった。木造の新しい牛舎で、牛たちはすり寄ってくるほど人懐っこい。「農家の農作業を担ってきた牛たちです。もう一度皆さんに親しんでもらい、糞は田の肥しにしたいと飼育を始めました」と前田さんは言う。いま親子牛10数頭を飼育している。

大石地区では土手の草刈する親子がいた。中平泰良さんと長男の敦章さん。「僕は早くに横浜へ出て働き、家族はまだ横浜暮らしですが、定年になって帰ってきました。親父に必ず帰ってきて棚田を守ると約束してましたから。親父は死にましたがお袋は元気です。幸い長男も今年春に会社を辞めて来たので親子で米作りをしています。この米は美味しい、仕事も楽しい。充実した毎日です」と泰良さんは仕事の手を休めて語った。

「土佐天空の郷米」の付加価値を高める

町の野菜や加工食品が並ぶ市場「さくら市」では、入口近くの場所で公社製の土佐天空の

郷米、米粉、煎餅、焼酎・甘酒等が販売されている。「土佐天空の郷米はとても美味しいけどちよつと高いので、贈答用に使う。甘酒やせんべいなどはよく買っています」と男性客。そのあと公社を訪ねて、土佐天空の郷米の品質管理と精米現場、加工品造り等を見学した。

まず見学したのはマイケルさんが製造中の玄米グラノーラ。料理人のマイケルさんは約20年前に奥さんの実家がある本山町にイターシエフとなった。本山町農業公社とレストランの分社化に伴い、10年前に閉店し、公社の加工製造部門で働くようになった。

グラノーラとは穀物のこと。熱と圧力をかけた玄米に味噌、蜂蜜、オリブオイル、香料等に加え、10種類のドライフルーツが入った栄養満点の美容食。土佐天空の郷玄米グラノーラは子供たちにも好評で、すぐ品切れする人気商品とか。「まだ他にもいろいろ試作中です。お米が美味しいから何を作ってもグッドです」とマイケルさんは言う。

事務所に隣接するハウスは、野菜の育苗がメインだが、いまは小鉢でパンジー等を育成していた。これを高齢グループが街路や公園に植えるのだという。

公社のライスセンターでは和田さんも作業服で精米作業に追われていた。お米はコンピュータのセンサーで上優良米、中優良米、その他の3段階に分けられる。色が白っぽかったり黒ずんだりしていても不合格品になり、これらが煎餅や米粉、グラノーラ等に加工されている。



▲ハウスではパンジー等の苗木栽培 ▲グラノーラの製造に励むマイケルさん



吉野地区には土佐天空の郷米で製造した米焼酎、泡盛の醸造所「ばうむ合同会社」がある。元体育館を活用した酒造所で、館内の一部には蒸留所もある。店に入ると木工芸品とコラボしてお酒を販売するお洒落なコーナーが設けられている。販売部長の廣瀬裕さんは「当社は地元産の杉や檜の木工品や伝統の木紋柄(繊細で美しい文様で作ったコースター)を製造する会社で、醸造所を開設した藤川社長は農業公社の理事長もしています。そのため中位の郷米を活用して付加価値を高めたいと酒造をはじめました。美味しい酒だと好評で、本山町の特産品になりました」と説明してくれた。京都出身、食に関心があるというから、いずれ土佐天空の郷米と地元野菜料理を木の皿に盛った料理を開発することだろう。

文/浅井登美子 写真/小林恵

●一般財団法人本山町農業公社 ☎0887-76-4333
http://town-motoyama.jp

▶右/「米焼酎土佐天空の郷」を手を、廣瀬さん
左/ライスセンターでは、コンピュータで玄米を厳しく品質チェック。低温保存して出荷前に精米する

▶有機資源センター新郷内の原料棟。堆肥の原料になる牛ふん、鶏ふんが畜産農家から集められる



青森県南部、十和田湖の東側に、山々や森林に囲まれて新郷村がある。農業が主要産業で、ニンニクと長イモが名産。畜産も盛んで、多くの乳牛、肉牛が豊かな自然の中で育てられている。そんな新郷村が進めているのが、「有機の里」づくり。畜産農家から出た牛などの排泄物を適正処理して堆肥を生産し、地元野菜農家に提供することで、地域ぐるみの資源循環型農業の確立をめざしているのだ。平成16年に稼働を始めた「有機資源センター新郷」を中心に順調に進んでいるこのプロジェクト取材した。

豊かな農業大地へ

理想の資源循環型農業をめざして 「有機の里づくり」事業

青森県新郷村
しんこうむら

畜産農家からの原料を元に
高品質の有機堆肥づくり

新郷村は、八戸と十和田湖を結ぶ国道454号沿いにあり、東北新幹線八戸駅から車で45分ほどで到着する。中心集落は国道に沿って続いており、村役場や神秘的な伝説に彩られたスポット「キリストの墓」もその沿道にある。

古くから農業が盛んで、村内にはニンニクや長イモ畑がなだらかに広がるのどかな風景をつくり出している。その他、ピーマン、ジャガイモ、カボチャ、トウモロコシ（郷のきみ）、米（天日米）などが村内で生産されている。

当地の畜産の歴史も古く、昭和の初めには酪農組合が組織され、青森県の酪農発祥の地となっている。昭和31年に、雪印乳業の工場が操業を始めることさらに酪農が活発になり一帯は一大酪農地帯へ。その後、乳用牛よりも肉用牛の扱いが多くなり、両者の割合が逆転。現在は後継者不足などから畜産農家は減少傾向にあるものの、それでも村内には肉用牛・乳用牛合わせて20戸の畜産農家があり、約2100頭の牛を育てている。

農業と畜産が盛んという土地柄を背景に、新郷村で平成16年から取り組んでいるのが、「有機の里づくり」プロジェクトだ。これは、



家畜排泄物法（平成16年に本格施行）を受けての「家畜排泄物の適正処理」と、有機資源と健全な土づくりの推進による「安全安心、新鮮でおいしい新郷野菜の生産」を目的にしている。つまり、村内の畜産農家から出る牛などの排泄物を堆肥に加工し、それを村内の野菜農家を使うことによって、家畜排泄物の処理とおいしい野菜づくりの「一挙両得」を図ろうという取り組みである。

すでにプロジェクトの初期段階は完了。現在、事業として家畜排泄物処理および堆肥化は順調に軌道に乗っており、生産される高品質な有機堆肥は村外からも引き合いがあるなど人気を集めるようになってきている。

◀上/3種の原料はフォークリフトでホッパーへ運ばれ混合される。
下/村内20戸の畜産農家が原料の供給元となる

堆肥の生産から販売まで一貫して 有機資源センターが行う

このプロジェクトの核となるのが、平成16年に稼働を始めた村営の「有機資源センター新郷（以下、センター）」だ。原料の受け入れから、年間3500tの堆肥の生産、そして販売までがここで一貫して行なわれている。センターを拠点としたこのプロジェクトのあらましを以下に説明しよう。

・原料の買い取り…：堆肥の原料（牛ふん、鶏ふん）を、畜産農家より1t当たり500円でセンターが購入。畜産農家は施設使用料として1t当たり1000円をセンターに支払う。この際、畜産農家へは村から1t当たり600円の補助が行われる。

・堆肥の販売…：加工され製品となった有機堆肥は、センターで販売される。大量購入する場合は、センターの堆肥運搬車による運搬（手数料1台1000円）を頼め、また畑に散布も依頼する場合は、センターの堆肥散布車による散布（手数料1台2000円）を頼むこともできる。堆肥散布車については、1台当たり1000円の補助が村から行われる。原料の搬入から堆肥として製品化されるまでは、約2カ月間かかるが、センターでは年間を通じてほぼフル稼働で製品づくりを行っている（搬入・販売は月曜休み）。次に、センターの堆肥生産の工程を順を追って紹介しよう。

①搬入…：牛ふん、鶏ふんなどの原料がセンターに搬入され、計量によって売買価格が決定される。

②原料棟入れ…：搬入される原料は、種類ごと（肉用牛、乳用牛、鶏）に分けられて原料棟へ。

③原料粉碎…：乳用牛の原料には牛舎の敷きワラが多く混じるので、乳牛分のみバイオチップパーで粉碎する。

④原料投入…：原料を、肉用牛7割・乳用牛2割（粉碎済み）・鶏1割の割合でホッパーへ投入。コンベアによって1次発酵槽へ運ばれる。

⑤1次発酵…：70～80℃に保たれたドーム内の1次発酵槽で、10～11日間、原料は攪拌されながら発酵を行う。

⑥脱臭…：1次発酵ドームに併設された脱臭設備によって原料の臭気を取り除かれる。

⑦2次発酵…：原料が製品棟へ運ばれ、混入している異物などが自動的に取り除かれた上で約50日間、2次発酵が行われる。

⑧製品化…：2次発酵を終え、製品としての堆肥が出来上がる。この時点で当初、原料の75%あった水分は、発酵を経て最終的に35%程度までに調整される。

村内の野菜農家を使うほか、 評判を聞いた村外からも購入者が

製品化された有機堆肥を、取材時に実際に手に取って見たが、乾いた土のようにサラサラとしていて臭いはほとんどなく、言われなければ堆肥とはわからないほどだった。

センターで生産された有機堆肥は、「ゆうきのめぐみ」と名付けられ常時販売されている。バラ売りは1t当たり4000円（1t当たり1500円の補助が出る）で、15kg（40L）

300円の袋入りもある。また、有用菌を入れた「ゆうきのめぐみAce（菌体入り）」はバラ売りのみ1t当たり5500円（1t当たり1500円の補助）となっている。

堆肥は、当地の特産であるニンニク栽培での需要が最も多く、秋の植え付けに先立つ夏場が書き入れ時となる。また、ナガイモやピーマン、大根など他の野菜用に春から初夏にかけての需要も少なくない。そのため、秋から冬にかけてセンターはフル稼働で堆肥生産を行い、春から夏にかけての需要に備えることになる。

「その時期の原料の確保が一番大変ですね。畜産農家に連絡して、原料はないかつねに確認しているような状況になります」と、有機資源センター新郷のセンター長を務める川岸幸夫さんは語る。



▲製品として販売される有機堆肥「ゆうきのめぐみ」
▼センター長の川岸幸夫さん。
後方のドーム内には1次発酵槽がある

▼原料がセンターに搬入されると、トラックスケールで車両ごと計量



▼「有機堆肥だから、安全でおいしいですよ」と、カボチャ農家の日向昌徳さん



センターが生産する高品質な有機堆肥は、村内の農家はもとより村外にもその評判が届くようになってきているという。「最近では、インターネットで見て『この堆肥がいらしい』と、南部町や八戸市などからも買いに来てくださる方がいるんですよ。ありがたいことです」と川岸さんは顔をほころばす。

新郷村住民以外でも堆肥の購入はできるが、補助金が適用されず、センターによる運搬や散布も頼むことはできない。それでも村外からの購入が増えているのは、新郷村で生産される堆肥が良質であるからにはかならない。

センターで生産された有機堆肥は、(一社)青森県畜産協会主催の「あおもり堆きゅう肥品評会」の土づくり系堆肥部門で、平成21年度・26年度の2度にわたって優秀賞を受賞。成分や発芽率などを厳密に調べた上で評価される同品評会だけに、そこでの受賞は「新郷村の堆肥」を大きくPRすることにもなった。

原料提供する畜産農家と堆肥を使う農家の双方にメリット

堆肥の原料を提供する畜産農家、堆肥を使用している野菜農家は、このプロジェクトや堆肥についてどのような感想を持っているのだろう。肉牛を肥育している「福山牧場」の福山満さんは、次のように語ってくれた。「長年、牛の排泄物の処理では頭を悩ませてきましたが、今はセンターがすぐに持っていつてくれるので、溜め込まずに済んで助かっています。とても良いプロジェクトだと思いますね」

一方、堆肥を使用しているピーマン農家の高根誠さんは、次のように語る。「以前は、牛ふんを寝かせて作った堆肥を使っていたんですが、堆肥になるまで時間がかかるし、完熟ではないため病害を引き起こす可能性がありました。センターの堆肥は完熟なのでその点安心で、土にすぐなじむのもとても使いやすいですね。また散布も頼めるので省力化も実現しています」

また、カボチャを生産する日向昌徳さんのお宅では、出荷用のカボチャの畑と自家用の野菜畑に堆肥を使用している。「完熟していない生の堆肥だと実の中に虫が



入りやすく、市場価値を大きく下げてしまいます。センターの完熟堆肥だと虫が入りにくいので、とても助かっています。うちは除草剤不使用、低農薬での野菜作りを進めているので、この堆肥が欠かせません」

村で話を伺ったかぎり新郷村産の有機堆肥はいいことづくめで、「有機の里」づくりの取り組みは、しっかりとこの村に根付きつつあるのを感じた。家畜から出た原料で堆肥を作り、それを使っておいしく安全な野菜を作る——その理想的な「農」と「食」のサイクルが、ここ新郷村で形になっているのを今回の取材で感じた。

▶上/村のピーマン農家の多くで有機堆肥が使われている
下/新郷村名産の長イモ栽培にも、有機堆肥が今や欠かせない
▼資源循環型農業を実現している新郷村の豊かな農地





◀「むらの大学」主催の餅つき大会に集まった人々で駅前広場は大賑わい
▼初日のまちあるきを一緒にした地元の高校生も多数参加した



▼「うんとイトコ南相馬！」農業プロジェクト班の学生が栽培してきた野菜も大人気



東日本大震災から6年、原発事故により避難指示が出されていた区域にも住民が徐々に帰ってきて、地域再生や復興が加速している。しかし自宅へ戻る人は中高年者が主で、未来を担う若者や子供たちの減少が顕著だ。さ

まざまな形で被災地の支援に関わってきた各大学は、支援から将来を見据えた共生の形を模索中だ。福島大学では平成25年度から特修プログラム「ふくしま未来学」を展開し、地域実践学習「むらの大学」を開講した。平成28年12月、南相馬市小高区で実施したフィールドワークを取材した。

目指し、被災地復興に寄与する実践的教育に取り組んでおり、「ふくしま未来学」を体系化したカリキュラム改革を行い、全学生を対象に、学類の枠を超えて学ぶことができる教育環境をつくっている。

地域実践学習「むらの大学」は、地域課題を実践的に学び、住民と学生が共に学ぶ交流機会の創出を目指す授業で、主に1年生が受講している。平成26年度より川内村と南相馬市でフィールドワークを行ってきた。今年度は、5・6月に受講生全員で南相馬市と川内村を訪ねた後、どちらかの地域を選択し、9月には3泊4日、12月には1泊2日で行われた。

「ふくしま未来学推進室」に勤務し、南相馬市を担当している地域コーディネーターの新田真由子さんから資料をいただき、2日間のスケジュールを聞いた。新田さんは岐阜県出身。地域問題に関心があるため、2年前に当時住んでいた東京から引っ越してきた。

12月の南相馬市でのフィールドワークは、1日目は「小高のコミュニティ再生に向け、大切なことは何なのか。震災前後の暮らしから読み取り、考える」をテーマに行われ、2日目はJR小高駅前で餅つきを行いお世話になった方へ餅をふるまうという。

フィールドワーク1日目である12月10日、午前10時に小高駅に集合した受講生12名と関係教授らが地元の高校生の案内で、今年4月から「小高産業技術高校」として新しいスタートを切る小高工業高校までの通学路を歩き、意見交換会を行った。案内してくれたのは、小高の復興に向け活動してきた小高工業高校と原町高校の生徒。このうち数名が春からこ

被災地との共生をめざして 福島大学[むらの大学]in小高

みなみそうま しおだかく
●福島県南相馬市小高区

災害を
バネに
①

「地域とつながる。
ともに学ぶ」

国立大学法人福島大学（学生総数4000人）では、原子力災害から2年経った平成25年度から、文部科学省の「地（知）の拠点整備事業」に選定され、「ふくしま未来学」を展開している。

「ふくしま未来学」では、原子力災害からの地域再生を



◀開通して賑わいを取り戻したJR小高駅



の通学路を通って高校に通うということだ。

南相馬市には工業、商業の2つの高校があるが、来年4月に合併して小高産業技術高校として再スタートする。

南相馬市(人口56900人)は旧町村単位で小高、原町、鹿島の3区がある。小高区は東京電力福島第一原発から20km圏内にあり全域に避難指示が出され、住民は各地へ避難していたが、昨年7月に避難指示が解除されたことで、住民の帰還が始まった。現在戻ってきた住民は高齢者を中心に1割程度といわれる。

家屋の点検・改修が各地で行われているものの、食事処やスーパー等はまだまだ少ない。我々が昼食を取るために行った中華料理店は超満員で、30分以上寒風の中で待つことになった。街は美しく整備され、小高駅前には案内場を兼ねた店や旅館もオープンしたが、避難を免れた原町区・鹿島区との差は大きい。

午後1時半からは小高区役所で「小高卓球クラブ」に属する住民10名と学生の座談会が始まった。学生は小高の特徴、災害前の暮らし、地域に残していきたいこと等を住民に聞いて地図に落とし込んでいく。「小高卓球ク

ラブ」のメンバーの中にはすでに小高で暮らしている方もおり、9月に実施したフィールドワークの時も家を学生たちの宿泊所として提供してくれた。約2時間の座談会を終えて、学生は小高の素晴らしさと住民たちの地域への愛着の深さを感じたようだ。住民からは「若い人と話して青春が戻った気がした」と語る一方で、「我々の空白の5年間は取り返せない」と怒る声も聞かれた。

畑を借りて野菜作り

一方、もう1人の地域コーディネーターの北村育美さんが、我々を学生たちが農作業をする小高の畑へ案内してくれた。北村さんは川内村を担当している。「川内村はすでに7割の住民が帰っています、もともと山村で若者が少ない村でした。私たちが行くのを楽しみにしてくれて、ふるさとへ帰るような気持ちになります」と言う。

小高の中心部を抜けると田畑が広がっている。一部でまだ汚染土の除去も行われているようだが、訪ねた畑はよく手入れされ、野菜が緑豊かに育っている。

2人の学生が大根やネギの収穫作業をしており、明日行われる餅つき大会で用いると共に、会場で販売することになっている。

「ここは有機農業をする根本さんの畑で、一画をお借りして土作りから教えてもらい野菜作りをしました。根本さんの協力のおかげでたくさん野菜を育てることができました」と合田航平さん(経済経営学類2年)と保科峻哉さん(人間発達文化学類2年)は言う。2人は南相馬市でフィールドワークを行った

昨年度の「むらの大学」受講生。南相馬市の風評被害払拭のために何かしたいと、「うんとイイトコ南相馬!」という学生団体を9名の学生で立ち上げ、農業と広報を担当するチームに分かれ、福島大学生に南相馬の現状を伝えながら、自主的に南相馬市に関わり続けている。

農業プロジェクト班のメンバー5人は、交替で小高の畑に毎週末に通い農作業をしているという。栽培してきた作物は、ジャガイモ、枝豆、小豆、トマト、キュウリ、ナス等。今は大根、カブ、ネギ、サニーレタス等と盛り沢山。「無農薬栽培なので虫にはすごく悩まされます」「でも広報プロジェクト班が月に1回大学そばのコンテナカフェを借りて、僕たちが育てた野菜を使った料理を提供したり販売したりすると、美味しいと好評です」と言う。掘り出した大根は、小ぶりながら形もよく青々とした葉のすべてでも食べられるほど新鮮。ネギもふっくらシャンとして香りがよい。

農地を学生に貸し、農業指導をしてもらっている根本洗一さん(79)は、ちよつと知られる有機農業の達人で、原発事故で避難を余儀なくされた後も避難先から通い田畑を耕し続けてきた。当時は、収穫した穀物も野菜も市販できなかつたが、何時ものように耕作して土壌を豊かに保ち、雑草の繁殖を防いできた。そういえば、小高区と接する浪江町の丘には、放射能汚染で放棄されたり農家から頼ま



◀浪江町の避難指示区域に取り残された牛たち300余を飼育している吉沢さん経営の「希望の牧場」

▶「うんとイイトコ南相馬!」農業プロジェクト班の合田さん、保科さん





◀仮設住宅集会所でお母さん手作りの餅汁で夕食を取る「むらの大学」受講生

れた牛を300頭飼育する吉沢正巳さん経営の「希望の牧場」がある。国から殺処分しろと何度も言われたが「牛飼いだからそれは出来ない」と拒否し、放射能汚染の残酷さを訴え続けてきた。研究者やボランティアの支援もあり、命を守る活動を黙々と行っている。丘からは発電所の鉄塔が一望でき、眼下には陽だまりの中で未だ眠っている浪江町の無人集落がある。

夜は仮設住宅で

小高の住民が入居する仮設住宅が鹿島区小池長沼にあり、今回学生はこの集会所に宿泊する。すでに半数が仮設住宅を出て新居等に引っ越していったため、住宅棟はひっそりと暗い。集会所では入居しているお母さんたち数人が、学生のために野菜とお餅が入った汁を作り、テーブルには果物も用意していた。「熱いものを食べてほしいから」と具がたっぷり入った大きな鍋だ。聞いてみると、この女性たちも年内に小高に帰る予定だったが、大工さん不足で家の完成が遅れているようだ。長年、仮設住宅の自治会長を担ってきた柴

伸一郎さんがやってきた。家族を福島市に残し自らは仮設住宅に住んで、住民の世話をしている。「災害の時よりもそのあとが大変だったね。家が崩壊した、家族が行方不明だ、どこへ避難するかなど問題が山積み。でも役場職員は手いっぱいに対応し

てくれないので、私らが飛び回った。今は補償問題がくすぶっている。小高の住民は賠償金が出ているが、被災者を受け入れている鹿島区や原町区には何も出ない。小学校で出身地域による小さな争いがあったと聞いています。農地は復興整備を終了したが、後継者がいないため、水田耕作をするか悩んでいる農家もいる」と柴さんは言っていた。午後6時過ぎに宿泊する学生が勢ぞろいした。夕食の後も遅くまで語ったようだ。

駅前広場は、餅つき、カフェ、野菜市で大賑わい

翌日も気温は低いが晴天。小高駅前の広場には「むらの大学」主催の餅つき会場が出来、野菜売り場やテーブル等が用意された。一角では「OMSB手作り委員会」の森山貴士さんや花岡高行さんが営むカフェもオープンしている。「OMSB手作り委員会」は、地域を活性化しようと地元の青年達がつくった会。今年4月に小高で高校が再開されるに当たり、「電車通学をする高校生に寛げる場所を」と中古の車を改装したカフェで、コーヒーを提供する。カフェの準備に関わってきた高校生らが楽しそうに取り巻いていた。ミニカフェは高校生たちも期待しており、当面は森山さんが土日に開店するという。大阪市出身の森山さんは、震災後に東京から南相馬市に移住してきてフリーランスのデザイナー、プログラマーとして活動している。珈琲通で煎れてくれた珈琲は抜群に美味しかった。福島市内に住んでいる根本さんの知人である菅原宏一さん夫妻は、根本さん栽培の餅米

で餅つきをすると聞いて出かけてきたという。持参のテーブルを設置して羊羹風に仕上げた柿のデザートを提供している。「福島は柿の産地なのに、食べない人が多くなった。熟した柿をミキサーにかけて寒天で固めたものです」という。車には他にも漬物など山のよう

に用意してきて無料提供したが、住民が増えるにつれてたちまちなくなってしまった。

11時頃になると、福島大の学生が双葉屋旅館を借りて蒸した餅米が次々と運ばれ、木白で餅つきが始まった。餅米は根本さんが有機栽培したもので、「むらの大学」でも田植えや稲刈りに関わってきた。雑煮の他、大根おろしやあんこをつけたお餅は美味しいと大人気。前日に収穫してきた学生が栽培した野菜も安い価格で販売され、昼頃にはほぼ売り切れてしまった。気が付くと、こんなに大勢の人が暮らしていたのかと驚くほど広場は住民であふれ、学生たちが元気に対応していた。本당にご苦労さま、そしてごちそうさま。

文/横田塔美 写真/小林恵 監修/新田真由子



▲「むらの大学」活動を展示して説明する「むらの大学」受講生



●ふくしま未来学推進室事務局 ☎024-504-2850
http://coc.net.fukushima-u.ac.jp



◀双葉屋旅館の女将(右)は、小高への立ち入り解除されると避難先から通いながら駅前広場に花を植える等の活動を続けてきた

▶宮古工業高校機械科の津波模型班のメンバー。
東日本大震災の津波を実際に体験した生徒もいる



精巧に作られた港や市街地を、水流がみるみるうちに覆っていく……。そんな津波のシミュレーションを模型を使って行っているのが、岩手県立宮古工業高校機械科の津波模型班だ。自分たちの手で立体模型を作り、それらを地元の小中学校などへ持ち込んで、擬似津波の実演会を頻繁に行っている。近年は、西日本にも活動を広げ、高知県の高校へ現地の模型も贈呈した。模型製作や実演会に日々汗を流す津波模型班の旺盛な活動を支えているのは、「災害の記憶を風化させたくない」という強い思いだ。

リアルな立体模型で津波防災 [津波模型班]の活動

●岩手県宮古市 岩手県立宮古工業高校

東日本大震災前から
課題研究として活動

災害を
バネ②

進行中だが、それでも津波の脅威には今後さらされ続けるといつていい。

そのような中、岩手県立宮古工業高校機械科の津波模型班は、風化してはいけない過去の津波被害を記憶に残し、今後の津波からできるだけ多くの「命」を助けるため、宮古市の立体模型作りに日々取り組んでいる。

3・11以降に始まった活動と思われがちだが、津波模型班がスタートしたのは、震災の6年前の平成17年。予想される津波に対して、沿岸にある工業高校として何かその対策に協

三陸を代表する漁港として古くから栄えてきた、岩手県宮古市。平成23年3月11日の東日本大震災では、巨大な津波で大きな被害を受けた。日本最大規模を誇った田老地区の巨大防潮堤を乗り越えるなど、8.5mともいわれる高さの大津波が市街を飲み込んだのだ。明治三陸津波、昭和三陸津波、さらにチリ津波など、これまで宮古はたびたび津波被害を受けてきた。3・11の教訓から、現在、津波に強いまちづくりが

力することができるといえるのではという考えから、3年生の課題研究として津波模型の製作が始まったのだ。班の創設時から生徒を指導する山野目弘先生は、活動を始めた理由を次のように語る。

「過去に何度も津波被害に遭っているものの、被害から年月が経つと記憶が薄れ、また防潮堤などもできたことで人々が安心してしまつたようなところがあつたんですね。今後も予想される津波被害を沿岸の模型を作ることで予測し、防災に生かすことができないうか、と考えたのが活動のスタートでした」

地道な班の活動が評価され
数々の賞を受賞

模型製作に当たっては、津波被害をできるだけの確に予測できるように、正確さが求められる。地図の等高線に沿ってまず何枚ものベニヤ板を切る。それを張り合わせて地形通りに立体化し紙粘土で肉付け。航空写真など



▲小学校やイベントなどで、子どもたちに模型を使って津波被害について解説
▼宮古工業高校自身も東日本大震災の津波被害を受け、数か月間、校舎やグラウンドが使えなくなった





◀模型は通常2500分の1スケールで作られ、鉄道、道路などはわかりやすい色で示される

を参考にそれに着色。道路や鉄道、主要な建物なども再現され、その土地の者なら「自分の家はここ」とすぐに指差せるほど精巧な模型が、こうして出来上がる。

基本的に年に1基のペースで製作され、班の創設時からこれまでに10基余りの模型が作られているが、津波模型班の活動は模型を作ったことで完了はしない。真の目的は、この模型を使った擬似津波の実演を人々の前で行うことで、津波がどのように浸水するのか、避難経路をどうとればいいのかを啓蒙することにある。そのため、擬似津波発生装置も班で独自に開発。色付きの水を模型に流し込むことで、津波の被害範囲が一目で分かるような仕組みを作り上げた。

これまで地元の小・中学校やイベントで行った実演は、東日本大震災で中断したものの約140回にも及んでいる。「こんなところまで水が来るとは思わなかった」「自分がいつもある場所からすぐ逃げないと危ないことがわかった」——リアルな実演を見た人たちは、口々にそんな感想をもらすという。

こうした津波模型班の活動は高く評価され、これまで「ぼうさい甲

子園 高校の部 大賞」(平成22・25・27年)、「防災功労者内閣総理大臣表彰」(平成25年)、「日本水大賞」(平成27年)をはじめ、数々の賞を受賞。またNHKなどのテレビ番組でも活動が紹介され、全国的な

反響を呼んでいる。

高知県須崎市の高校との交流から、 現地の模型を製作し贈呈

「この活動が全国に広まってほしい」との思いから、近年では、全国の高校との交流や各地に出向いての実演会を行う機会も多い。平成26年には、夏休みを利用して、南海トラフでの津波被害が想定されている関西・四国方面での実演会を実施。大阪府、徳島県、兵庫県で延べ22回もの実演を行い好評を集めた。

そのような中で特に交流が深まったのが、平成27年に神戸市で開かれた「ぼうさい甲子園」をきっかけに縁が生まれた高知県須崎市の須崎工業高校だ。須崎市は、近い将来に発生する可能性の高い南海トラフ地震で津波被害も予測されている。最大クラスの地震が発生した場合、須崎市を襲う津波の高さは最大で25mに達するとも予測されていることから、両校の間では「南海トラフ地震に備えてもらおう」と須崎市周辺の模型を製作して寄贈する話が持ち上がった。

津波模型班では、1年をかけて須崎市の模型を製作。平成28年7月、この模型が完成し、贈呈式に合わせて津波模型班の生徒らが高知を訪れた。実演会には、須崎工業高校のほか、須崎高校、室戸高校の生徒らも参加。3校の生徒らは、自分たちの街に浸水が及んでいくシミュレーションに、津波に対する備えの大切さを改めて実感することとなった。

大切なのは「伝えていること」

今回の取材で会った津波模型班の生徒たち



▲学校から宮古市に寄贈され、市役所分庁舎に展示されている市中心部の模型
▶10年以上にわたって津波模型班の指導に当たる、山野目弘先生

は、東日本大震災の際、小学校6年だった。学校から裏山に避難するなど、そのときに津波から実際に逃げた経験を持つ生徒もいる。また、宮古工業高校自体も当時、津波被害を受けており、それらの意味からも班のメンバーたちの防災意識は高い。模型製作や実演活動に携わる彼らに話を伺ってみた。

「模型作りの活動を通して、津波被害の記憶を風化させることなく、災害を直接知らない次の世代に、大切なことを受け継ぎたい」

「津波模型班が実演会を続けることで、より多くの人が津波の恐ろしさを知り、そこから助かる方法を一人ひとりが身につけてほしい」

高校3年生の彼らがこの高校を巣立つ日は近いが、彼らの後輩たちによってまた新しい模型が作られ、数多くの実演会が行われていくだろう。そして、全国各地にその活動が広まっていくことで、たくさんの方が災害をより身近にとらえ、効果的な防災を実践していくに違いない。

●岩手県立宮古工業高校 ☎0193-67-2201



▲噴火前の新岳(気象庁提供)
◀平成27年5月、大噴火した新岳
(撮影/真船恭子)



新岳の噴火で全島民が避難した日

私たちが住む口永良部島は、平成27年5月29日午前10時頃に新岳が噴火し、その日の夕方全島民は島を退去し、島は無人と化した。屋久島に身を寄せた私たちは、噴火災害被災者として、避難生活を半年以上にわたって送ることになる。

噴火災害を島づくりのチャンスに 水と緑の“火の島”口永良部島

貴船庄二 (口永良部島元公民館長) エッセイスト 鹿児島県屋久島町口永良部島

災害を
パネに
③

屋ヶ峰は標高291mの山でN.T.Tが頑丈な建屋を有して取り壊す予定だったが、町の避難所として借り受けた。私の家からは車で30分かかる。ガスや各室の電気を停め窓を閉め、鶏と野良猫は彼らに任せようと家を出た。途中孫6人が通っている金岳小中学校へ寄ったが、すでに職員の車で避難していた。年寄りが残っていないかと本村地区をゆつく

当日私は老後住む家を建設中で、妻は昨夜から屋久島に出向いており、Iターンの関口さん(10年程前島民募集で群馬県から親子3人で移住してきた)が屋根張りを手伝ってくれていた。お茶を出そうと厨房にいる時、ゴーツとジェット機が通過するような振動音がし、噴火だとすぐ分かった。何度か噴火を経験しているの、黒煙を見て煙が南に流れているので安心したが、関口さんの家がある前田地区方角へ流れている。そのため彼は車で急いで帰って行った。

前年の26年8月の噴火で、本村区民は番屋ヶ峰へ避難結集することに決まっていた。番

り走ってみたが消防団員が誘導を済ませていた。私も10年間消防団員をし、今は娘婿が団長、息子の森が副団長をしている。灰かぶり姿で関口さんも来て前田地区は火山灰が凄いと云う。向江浜で一人暮らしをするゼンさんも消防団員に抱えられて到着した。

26年の噴火ではレベル3であったため屋久島に自主避難し1週間ほどで帰島したが、今回はレベル5のため、午後3時に全島民避難が言い渡された。身の周りのものを整えるため1時間だけ帰宅、4時にフェリー太陽に乗る予定だ。帰ると鶏を小屋から放してたつぷり餌をやり、水はタンクからオーバーフローしている。水があれば草や虫を食べて生きて行けるだろう。のら猫も同様だ。

フェリーは午後4時過ぎ全島民と工事関係者150名ほどを乗せて島を離れた。船の甲板から見る様子から今回の噴火が如何に凄ま



▲民宿「くちのえらぶ」の前で、貴船さん夫妻

きふね・しょうじ氏 昭和22年大阪吹田市生まれ。結婚して東京国立市で暮らす、長女が3歳になった時、子供が安心して暮らせる田舎に住みたいと口永良部島に移住した。10年間暮らしたが、濃密な人間関係に疲れて島を逃げ出し、関西で8年間生活。再び島へ、現在に至る。島の公民館館長辞任後は民宿「くちのえらぶ」の経営をし、観光客受け入れの拠点になっている。屋久島の季刊誌『生命の島』にエッセイ&イラストを連載していたが、現在は廃刊。





じいかを思い知った。

避難生活は私にとって結構忙しく、そして暇でもあった。何が忙しいのか？ 集会や催しが実に多く、昼は商工会へ出向き、夜は町の総合センターで励ましのバイオリン・コンサート、徳之島から高校生が慰問に来てくれたから仮設住宅談話室に顔を出すとという具合で、床屋に行くとか資料をまとめようという時間が取りにくかったが、感謝、感謝であった。

しかし忙しいのに暇でもある。島ではやることだらけ、私の場合は大工仕事や草払い、水源地へ行って水の確保、さらに鶏やのら猫の世話もある。とはいえ鶏や猫はもっぱら妻の係で、普段は戸繕いや竹の子掘り、魚釣りが私の仕事である。帰島したら田圃復活の準備も待っている。

2015年11月30日、完全帰島に向けて町長はじめ職員から説明会が行われた。その資料には長期滞在型帰島案が記されていて、これを適用すると12月25日の町長の帰島宣言を待たず島に帰れる。12月8日、私と妻は車に

荷物を満載して島に戻った。船は住民や復興関係者に乗せてごった返した。

無人化した島は電気も水道も止まり、台風で学校や民家では浸水もあった。本村以外の集落は帰島後も停電が続いた。多くの家で停電により家電製品が使えなくなる事態となり、改めて電気に頼る私たちの暮らしが見えた。

私の住む田代地区は被害が少なかったが、バイクは動かず、家の中は閉め切っていたため凄まじいカビと熱気。金具はすべて錆び、植物の幾つかは火山ガスの影響で枯れていた。以前は網で囲って侵入を防いでいた鹿が庭を駆け回っていた。そうなると思えば鹿が増え、今までいなかったヤマビルもいて、森は育たず、畑は囲いが必要になる。人が住まないの家も島もダメージがあることを実感した。

それでも帰島して5日目に宿を再開した。大雨で道路が寸断されていたため帰宅できない父子や県環境課職員、火山研究者、作業者たちを泊めることになった。嬉しかったのはタンクから水が出ていたため鶏は20羽のうち7羽が残っており、やがて猫たちも7匹が戻ってきたことである。

避難中に国内外で我々以上の災害を知り、私たちが如何に恵まれているかを知った。多くの人の善意でどれほど励まされたか、これに応えるには島でしっかりと心正しく生きていくことだと思ふ。いつ噴火するやもしれぬこの島では皆が共に暮らすのが当たり前のことだ。島民137人のうち108人が帰島したが、新岳に近い集落の20世帯は未だ避難生活を送っている。

130人が暮らす、緑の火山島



▶貴船庄二氏の長男、貴船森・恭子さん夫妻と子どもたち

口永良部島は全島が世界遺産屋久島を含めた国立公園。瓢箪型をしていて、くびれたところの南と北に大きな入江を有し、南の入江に町営船フェリー、太陽が発着する。島で最も大きな集落・本村である。島の周囲は50km近くあり、結構大きな島で、島の中央に火山、新岳と古岳が連なっている。新岳はいまも活動中で、古岳は火口が埋まり、噴気を上げる箇所では硫黄が黄色く固まっている。ひと昔前はこの硫黄を採取する人たちの集落が火口からさほど遠くないところにあり、噴火で全滅した。本村港の向かいにある向江浜地区は、火口から谷筋を下がった海岸にあるため、過去には豪雨の土石流で大半の家屋が押し流され、多数の死者を出している。残った島民は谷筋から離れた前田地区に移り住んだ。今回の噴火では前田地区は辛うじて火砕流からのがれた。

私たちが島に移り住んだ昭和48年頃にも小噴火を幾度か起こしていたが、30数年で緑は

さらに進行、マルバサツキ等の灌木が火口近辺まで生え、6月下旬には山が赤くなるほど花が咲く。本村集落の丘の下の田には豊かな湧水があり、川を形成して海へ流れている。西側にも岩の割れ目からはゴボゴボと湧き出すコバンコと呼ばれる湧水があり、水田も潤している。これは島に奇港した船が小判をほたいても手に入れない水ということらしい。

私が住む田代地区は車で15分ほど、歩けば小一時間。かつては10世帯いたが、今は私たち夫妻と一人暮らしのヒタカさんだけ。廃校になった小学校の廃材や島にある豊富な材を利用して手作りの家を建てた。ユースホステルにしたいと思ったが、制約が多いため民宿にした。簡易水道がないため、近くの小川から湧き出る水を集めてパイプで送ってタンクに貯水している。渇水期にも枯れることがない実に美味しい水だ。

口永良部島の良さは、第一に魚が豊富に生息し、農地が豊かで、山菜もいっぱい。そして温泉が豊富（4つの効能が異なる温泉がある）、水の美味さである。ちよつと頑張れば自給自足生活が可能である。

再度、口永良部島へ

ところで、私たち夫婦がなぜ口永良部島に移住したのか。

田舎暮らしをしようと決めて、私は北海道から南下し鹿児島に来て海にぶち当たり、その先に沢山の島があることを知った。島に行くなら徹底的に不便な島がいい。トカラがよいと思ったが次の出航は1週間後というので屋久島行の船に乗ったが、屋久島はとんでも

ない大きな島。どん詰まりで、そこにいたらそこに居るしかない島がいい。そんな私を見た係員は「もうすぐ口永良部島の船が出る」と教えてくれた。いまはフェリーで1時間40分だが、当時は2時間20分、無人島のように見えた。

港に入ると瓦屋根の家がぎっしり並ぶ集落があり、島のギンザ通りと呼ばれる雑貨店や理髪店もある。翌日役場出張所の職員から15軒の空き家があると案内され、ここだと思う家があり、移住して借りることにした。島を出たその夜噴火があったと新聞に出ていたが、妻は「私たちが歓迎しているのよ」と笑って言う。その時私は26歳、長女長男と共に、妻は次女を身籠っていた。

この島で10年暮らし、なぜ逃げ出したのかについても軽く触れたい。結論は、濃密な人間関係にくたびれたということである。私は自己中の人間だが、妻は普通の女性で、島では皆に頭を下げ挨拶をした。こまめに料理を作っておすそ分けもした。やがていつも人が来るようになり、日中は誰かがお茶を飲み、夜は誰か呑み助がいた。妻は家にいて子供たちのおやつ作りや料理をしているので、爺さん婆さんに加えて小さい子を抱えた母親も来るようになった。おやつや昼食も食べて子どもを遊ばせ、夕方にやつと腰を上げる。こんなことが10年続くうちに、誰かが来ると妻は箆の陰に隠れるようになった。目つきがおかしくなっている。

私は即島を出ることにした。子供は島を出るのを嫌がり、我々もいつか帰島するだろうと思いつつ、再度希薄な街暮らしを求めて、

兵庫県たつの市に移住した。

再び島に戻ったのは、次女は18歳前だが、子供が私たちの手から離れたと判断したこと、妻がもう逃げださず対応できると自信を持ったこと。8年間の関西暮らしを辞めて次女と3人で再度島へ戻り、現在に至っている。そのころ島では児童生徒の減少を憂う声が上がっており、公民館に協議会を立ち上げ、山海留学、島民募集を始めることになった。

私らが島で宿をするようになると長男も島へやってきた。それぞれ結婚し、今では孫が10人、島生活を謳歌している。

口永良部島は終戦後は一時2000人を超す人口を養ったが、経済成長期に入ると一カ月に500人が島を出たという。

現在130名ほどが島で暮らしている。小中学校は児童4人、生徒7人、教員10人で構成され、他に幼児が2名と先生が1名いる。大変恵まれた環境だと感謝している。

まだ復興は道半ばで課題は山積しているが、帰島した住民は「やっぱり口永良部島がいい」と言っただけで畑仕事や山菜取り、漁業に精出している。いま島で会社をする久木山栄一さんが中心になって、再び山海留学や子供のいる家族に移住を呼びかけていくことになった。

島にとって子供はどの子も我が子孫であり、どの子も兄弟であり、ひとつの家族といえる。沢山の子供が生まれ育つ島、これが私たちの願う島だ。ここから口永良部島はまたはじまる。



▶島では魚も野菜も豊富。集まるとすぐ山海の幸で宴会が始まる

全国過疎問題シンポジウム 2017 in さが 平成29年10月19日(木)～20日(金)

佐賀県への皆さまのお越しを、心よりお待ちしております!!



藤野の棚田(唐津市)



多久聖廟(多久市)



縫ノ池(白石町)



海中鳥居(太良町)

- ・開催日(予定)
平成29年10月19日(木)～20日(金)
- ・開催場所(予定)
1日目 全体会、交流会：佐賀市
2日目 分科会・現地視察(4会場)
唐津市、多久市、白石町、太良町

[事務局] 佐賀県地域交流部 さが創生推進課(担当) 納富 ☎0952-25-7376

佐賀県は、北は玄界灘、南は有明海という2つの海に面し、広大な佐賀平野でのバルーンフェスタや有田焼、唐津くんちなどの伝統・文化が根付いています。

このたびのシンポジウムは、住民が自らの地域に誇りを持ち、自発的に地域づくりに取り組んでいただくことの大切さについて、改めて全国の皆さまと認識を共有する契機とし、それぞれの地域の発展につながるシンポジウムにしたいと思っています。

編集後記

▼「霧の海」が美しいことで有名な三次市の高谷山。早朝に山頂から見下ろす風景が最高だとか。また、三次市の「奥田元宋・小由女美術館」は「月が美しく見える」ことで知られ、満月の夜には21時まで開館延長している。取材に訪れた日はちょうど満月だったが、あいにくの雨…。日頃の行いが悪いのかなあ～。(小)

▼ここでしか買えない本を集めた「小さな村の本屋さん」も、いつかは開きたいと語ってくれた丹波山村の人々。「でばらのような本も置きたいのです」と、嬉しい言葉もいただいた。小さな村の沢山の夢、応援しています。(淑)

▼今回の取材旅行では、地域の旅館や民宿に泊まり、その地方の歴史や暮らしに触れる機会となった。島根県雲南市木次町の「天野館」は大正時代初期に建てられた別館で、大正ロマン溢れる家が貸し切り。2階の大広間は高齢者たちの集会場としても活用している。高知県本山町の旅館「高知屋」はかつては芸者衆が居住したり宴会した宿。四角く廻廊して沢山の部屋があり、中庭には草花が生い茂る。宮尾登美子の小説の世界を彷彿させる。民宿では、本誌でも紹介した群馬県南牧村星尾の「かじか倶楽部」。鴨川市では大山千枚田近くの農家民宿「五郎兵衛」、その日は夕食は用意できないと言われて夕食して帰宿すると、地酒と手作り肴が用意されていた。相馬市小高では旅館「双葉屋」が満室の折はビジネスホテル「六角」が小林カメラマンお薦めの常宿。宿は部屋の雰囲気と料理の他に、迎えてくれる人とのふれあいが何よりも楽しい。(浅)

De POLA No.49

【でぼら】2017年

発行日/平成29年3月5日

発行/全国過疎地域自立促進連盟

〒105-0001 東京都港区虎ノ門一丁目13番5号

第一天徳ビル3階

☎03-3580-3070 FAX03-3580-3602

http://www.kaso-net.or.jp/

編集/会編集工房アド・エー

「復興のための行動学」など6コースがある。文部科学省の補助金は28年度で終了するが、学生には

宮城県では東北大、東北学院大、石巻専修大、東北福祉大、東北工業大など20校が連携して単位互換を行う「学都仙台コンソーシアム」を設立、「復興大学」というテーマで復興人材育成の講座を行ってきた。地震や発電所事故等のメカニズムや防災、減災を考える「復興の科学技術」、災害時の行動や災害後の生活、健康維持を考える「復興のための行動学」など6コースがある。文部科学省の補助金は28年度で終了するが、学生には

2004年の中越地震では、首都圏の多くの人が支援に訪れ、それを機に新たな交流が生まれ、1ターニンして中越で暮らす人も出てきた。新潟県長岡市にある公益社

若者がムラに短期滞在
「にいがたイナカレッジ」

若者がムラに短期滞在「にいがたイナカレッジ」

長期滞在や定住を前提としたものではないため、ちょっとした気で参加してみようという若者が多く、特に好奇心旺盛な女性たちに人気がある。「移住女子」という名前で田舎暮らしの日々を都市へ発信する女性グループもあり、豪雪の山歩きや味噌・郷土料理を作るイベント等も人気だという。併せて住民と連携した防災安全対策への取り組み、都市での交流イベントやツアーの企画等、若い人の提案が生かされ、成果を上げている。

東日本大震災から6年、復興が急ピッチで進んでいるが、災害地では人口減少が続ぎ、産業再生も停滞している地区が多い。被災地の支援や現地調査等を行ってきた大学の取り組みの一例として、福島大学の「ふくしま未来学」、実習学習「むらの大学」を取材したが、宮城県の大学についてもその一部を紹介する。

石巻専修大学は震災前から地域自治体や企業と連携した地域貢献活動に取り組んできたが、石巻市が最大の被害地となり、大学が自衛隊等の災害前線拠点となったこともあり、震災直後から「復興共生プロジェクト」を立ち上げ、大学施設の提供、避難所でのボランティア活動、防災・復興に関する講演会・シンポジウム、被災者や事業者の支援等、幅広い事業に取り組んできた。ご当地グルメの開発や水に浮く車のシート開発等でも話題になっている。

団法人中越防災安全推進機構では、中越地震の復興への経験を生かして、さらに中山間地域の集落の活性化をはかる取り組みとして、都市部の若者が1年間に中越地区の集落に滞在する「にいがたイナカレッジ」を行っている。「暮らしに学ぶ、人に学ぶ」がテーマで、地域が活かされてきた若者を受け入れて、農業や山仕事、郷土食品づくり等を共に行うという実践的プログラム。

「学都仙台」コンソーシアム

他校生との交流や選択科目以外の分野を学ぶ機会として好評で、今後も規模を縮小しても継続していく予定だ。

[DePOLA] Back Number (近刊号)

No.41 これが自慢の味・風土・人——地域ブランド作戦



生いもこんにやくNO.1(群馬県東吾妻町・小山農園) 450年の歴史を経て地域ブランドに、西海えだおれなす(長崎県西海市) 飼料用米生産と「こめ育ち豚」(山形県遊佐町) 森を救う家具「ニシアワー」(岡山県西粟倉村) 京丹波の伝統作物(京都府京丹波町) 山里文化と暮らしを語り継ぐ「遠野物語」の里(岩手県遠野市) 富良野ランダーの里(北海道中富良野町) 米蔵・しおまち唐琴通り・須恵器(岡山県瀬戸内市牛窓) 「森の香苺蒲ご膳」(佐賀市富士町) トキと暮らす郷(新潟県佐渡市) 特別ルポ／東日本大災害・災害地からの報告

No.42 新たなコミュニティの実践——農山漁村の再生



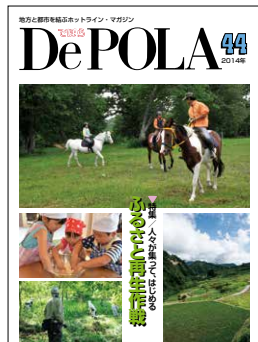
中山間地域の住民をサポートする(高知県仁淀町・越知町・いの町) スキー場跡地に森林を復元(長野県長和町) 天草漁師の「ひと網オーナー制度」(熊本県天草市有明町) 油屋・万屋・車屋を地区で運営(広島県安芸高田市川根) 「元気がいい」集落支援プログラム(和歌山県田辺市) 協力隊から起業・就業(北海道喜茂別町) [自然エネルギー利用] 観葉植物栽培日本一(鹿児島県指宿市) 環境モデル都市(高知県橋原町) 女子大OB生の田舎暮らし&地域おこし(茨城県常陸太田市) 村立おといねっぶ美術工芸高校(北海道音威子府村)

No.43 1ターンして新規就農——地域に農の新しい風



担い手を育成して産地活性化(大分県由布市庄内町、豊後大野市) 河岸段丘は命と恵みの大地(新潟県津南町) JAと農家で築いた「南郷トマト」50年(福島県南会津町) 農家の心意気をニューファーマーに(北海道士別市朝日地区) 自家製レモンで大三島リモンチェッロ(愛媛県今治市上浦町) 「農業をする」という人生の作り方(岩手県西和賀町) 地域の美味しい産直市「お山の大将」(徳島県美波町) 休耕田にしない・親子で励む米作り(広島県庄原市総領) むかし味「げんたのやさい」(山梨県笛吹市芦川) 高原を彩るヒマラヤの青いケシ(長野県大鹿村) 環境未来都市しもかわ(北海道下川町)

No.44 人々が集って、はじめる——ふるさと再生作戦



「美味しい」の感動をつなぐ島(山口県周防大島町) 貴重な動植物と農業青年を育む里山(鳥取県日南町) 四ヶ村の棚田と肘折温泉で創るふるさとのにぎわい(山形県大蔵村) 主手は子供たち(福島県伊達市月館町) 馬にふれ、馬たちの時間で暮らす(北海道浦河町) ボランティアが続ける森や里山支援/JUON NETWORK 森の楽校・田畑の楽校 産学官でオホーツク地域産業の創成を/東京農大オホーツク実学センター 平成25年度過疎地域自立活性化優良事例/特定非営利活動法人 奥矢作森林塾、一般社団法人 なかわり生姜山農園、雪浦ウィーク実行委員会、寄り会みなまた、若松ふるさと塾、会津山都そば協会

No.45 地域の創造活動を支援する



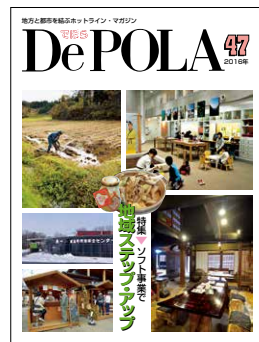
集落再生をめざす小さなユートピア郷/大宮産業・みやの里(高知県四万十市西土佐) 移住してくる家族をバックアップ(長野県伊那市高遠町) 地域で安心して暮らす/ゆうぼりコンパクトシティ構想(北海道夕張市) 各分野の専門家が地域に根を張って/対馬市島おこし協働隊(長崎県対馬市) 自然と地域の中で輝いて学ぶ「島留学」県立隠岐島前高校、島まるごと図書館プロジェクト(島根県海士町) 学生の提案をビジネスに生かす/十日町市「トオコン」、農業体験・ボランティア活動に無料バス(新潟県十日町市) 風土に合った「小さな農業」の創出(山形県舟形町) 山里の暮らしの知恵と資源を生かして/歩くも市場・栃尾里人塾(岐阜県郡上市明宝) 地域の見守り役も担って/予約型乗合タクシー(福岡県八女市)

No.46 若者の地域貢献活動



島の柑橘園を受け継ぐバンドマンたち(愛媛県松山市中島) 農を軸に「生きがいの仕事作り」/楠グリーン村(山口県宇部市) 高根の暮らしを明日へ繋ぐ(新潟県村上) 450人の子供たちの第二の故郷/暮らしの学校だいたらぼっち(長野県泰阜村) 奄美大島で大学生が「島キャン」休耕地を花と蜜蜂の丘に/油木高校(広島県神石高原町) 地域の農業と共に/名久井農業高校(青森県南部町) 道北農業の未来を担う/北海道名寄産業高校(北海道名寄市) 平成26年度過疎地域自立活性化優良事例/ビジョン早田実行委員会、もんでこい丹生谷運営委員会

No.47 ソフト事業で 地域ステップ・アップ



豊饒な大地から「美味しい」発信、ブランド作物&グルメの里(青森県つがる市)人、モノ、想いが行き交う交差点「こってこでいけだ」(福井県池田町) 男鹿の魅力をパワーアップ、減農薬栽培と放棄水田の活用(秋田県男鹿市) バイオガスプラントの余熱利用、チョウザメ、マンゴー飼育(北海道鹿追町) 全国が熱い視線を注ぐ「日本の子育て村」(鳥根県邑南町) 地産産業・伝統技術を継承する小学生の「たたら体験学習」(鳥根県奥出雲町) 作って、食べて、歩いて実感、山の暮らしをナビゲート(山梨県笛吹市芦川) 暮らしの中で街並み保存と資源活用、北国街道今庄宿(福井県南越前町) 海の道・神々の島、舌岐市立「一支国博物館」(長崎県舌岐市) 駅舎は若者や町民活動の発信地「えき・まちネットこまつ」(山形県川西町)

No.48 地域の伝統技術を継承する



「オククラフト」オククラフトセンター森林工芸館(北海道置戸町) 島民の暮らしと共に「久米島油」(沖縄県久米島町) 葦原の育成と「茅葺き屋根」の修復(宮城県石巻市北上町) 幻の手工芸品「金唐草紙」の復活(福岡県築上町) トータル林業をめざして(長野県根羽村) 天空の里で「石積み学校」(徳島県吉野川市美郷) [地域おこし協力隊員が地域伝統の技を学ぶ] 奥会津編み組細工(福島県三島町) 雄国根曲竹の竹細工(福島県喜多方市熊倉町) 3人の隊員が蕎麦打ち修業中(喜多方市大和町) 鉄に魅せられて鍛冶職人に/鍛冶工房金床・秋田和良(広島県安芸太田町) 新感覚の五箇山和紙を世界に発信(富山県南砺市五箇山) 平成27年度過疎地域自立活性化優良事例/大野地区公民館、五名活性化協議会、田幸ふるさとランチグループ、一般社団法人 IORI倶楽部